
らき すた オレと愉快な仲間たち～旅立ちの日へ～

ME-GA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた オレと愉快な仲間たち～旅立ちの日～

【Zコード】

Z2575P

【作者名】

M E · G A

【あらすじ】

少年は一人だった……。

そんな孤独の少年、倉場かいとを救つたのは4人の少女だった。

『かいと君は一人じゃないよ』

『もう、そんな悲しいこと言わないでよー。』

『ありがとう、かいと君』

『頼りにしていますよ？ かいとさん』

『みんな、ありがとう………』

『らき すた オレと愉快な仲間たち』衝撃のリメイク版！
新キャラ、新イベントを加えて再始動！！

タイトル変更しました

取扱説明書・Iの作品について（前書き）

諸注意：

私の小説、

『らき すた オレと愉快な仲間たち』は私の初めての小説であつたため、

至らぬ部分が多岐ありました。

というわけで、

リメイクヴァージョンとして新シナリオを加えて新規連載とさせていただきます。

取扱説明書・「」の作品について

「」の作品を読むにあたって：

【用意するもの】

- ・寛大な心
- ・原作愛
- ・P.Cのバッテリー 適量（ノートPCの場合）

【読む手順】

- ? ·読みたいページを開きます。
- ? ·読みます。
- ? ·? へ戻る

【注意！】

- ・目に入ると危険です。適度な休憩を挟んでください。
- ・お子様の手の届かない所に保管してください。
- ・家族や友人に見せることはあまりおすすめできません。
- ・『過度な期待』をPCの近くに置かないでください。爆発する恐れがあります。（作者が）
- ・必ず換気をしてください。

以上の注意を守らず、

「最近、親とか友達の視線が冷たいんだよな。アソツのせいだよ
なんてことになつても作者は一切責任は負いません。

始まりの出会い

高校に通い始めて3回目の春が来た。

オレは今年で3年生、高校最後の年なのだ。

だからと言つて思い出す限りに友達と沢山遊んだりとかするつもりは毛頭無い。

第一、友達なんていないしな。

別に難関大学に合格するために遊ぶ暇もなく勉強してただとか、脇目もふらず部活やスポーツに打ち込んでたわけでもない。

いらないんじゃない。 いらないんだ。

そんなどうでもいい話を聞かされるよりは空でも見てた方がいい。
もしくはネットだな。

余計な意識はしないでいい分、気楽だ。

なら、どうして学校に通っているかといつと、

祖母が原因だ。

育ての親である祖母は何かとオレを可愛がつた。
そして小さい頃から色々なことをオレに教えた。

その大半は既にオレの脳内には残っていないが、どうでもいいことばかり記憶している。
あとは察してくれ。

そんなわけで学校に通つたはいいがほとんど意味のない3年が過ぎようとしていたわけだ。

教室に入ると予想通り、生徒達は騒ぎ立てている。

教師のいない教室はほとんど生徒のものだからこうなるのも無理はない。

だが、それはオレにとって騒音以外の何でもないし、オレは顔をしかめつつ自分の席へ着き、鞄から本を取り出した。

遅刻、ギリギリの教師、黒井……だつけ？　は始業式へ遅れずに行くことを告げた後、バタンと教卓に突っ伏して動かなくなつた。解散する雰囲気が出たため、オレも椅子から立ち上がり講堂へと向かう。

何気なくオレの視界に入ったのは一人の女生徒が落としたカード。

テレカぐらいの大きさのもの。

でかでかと印刷されているのは何故か『ミルビーム』発射のボーズをとった『長』。

(原作読んだるのか……?)

オタクで悪いか。

製造者を少し疑いつつも落とした女生徒を追う。
特徴のありすぎる姿だったからか、落とし主はすぐに見つかった。

腰まである青髪にピヨンと飛び出たアホ毛……は人のこと言へんが。
そして何より背が低い。小学生か?

「……おい、アンタ。さつきこれ落としたぞ」

女生徒はカードを確認すると餌を『えられた猫みたいに瞳を輝かせた。

「お、おお～～！ ありがと、長門 の恩人さん！」

「ちょ、伏せられてねーし」

明らかに の位置おかしいだろ。

「ま、そういうことだ。次は落とすなよ?」

「あ、そーだ。後で一緒にごはん食べよーよ。お礼も考えなくちや
「いや、別々……」

説明しよう

祖母に幼い頃から叩き込まれたことがあった。

それは

『女の子のお願いはまず聞いてあげること』
だった。

オレはただ……

「あ、……わ、分かつた……」

と、言うしかなかったのだ。

オレの運命はここから大きく、

動き始めた。

運命を変える話 前編

始業式も終わり、なんやかんやで昼休み。（なんやかんやには突っ込まないでくれ）

ちつちつ……名前は“泉こなた”。
オレは泉に昼食を共にすることになんやかんやで丸め込まれてしまつたわけだが。

「昼飯忘れた……」

そう。

朝、盛りつけた後にテーブルの上に置いてそのまま放置してしまつたワケだ。

もちろん弁当のつもりだったから金なんて無い。

「しゃーねえ。昼食は断つて……つて何が『しゃーねえ』なんだ……」

最初つから一緒に昼飯なんて乗り気じゃなかつたんだし行かなくてラツキーじゃないか。

なーんて思つていたが……

「やつほ～。屋上行!～」

「や、悪いな。弁当忘れたんだ。だから昼飯ト……」

「あ～。じゃあ私の分けてあげるよ。みんなも話聞けば分けてくれるつて」

玉砕。

当たつて砕けました。

オレは泉に屋上へと連行された。

オレをかこむ4人の女子。
いやー、女生徒つていいなあ……

「じゃ、ね だらうがああ…………」

「うおっ！ いきなり叫んでどしたん？」

「……なんでも。自分の不甲斐なさを嘆いただけだ」

泉にツインテつり目の紫髪の生徒、リボンたれ目の紫髪に眼鏡巨乳の桃髪。

さつき見た泉以外のだいたいの特徴はこんな感じだ。

「かくかくしかじか、というわけで長門の恩人の倉場かいと君だよ」

」

「ちょっと待て。何故オレの名前を知っている？」

「だつて同じクラスだし」

「ていうかアンタ強引に連れてきたんじゃないでしょうね……」

ツインテの方はじと目で泉を見ていた。

「だいじょーぶ。快く了承してくれたから」

「好きで来たワケじゃないが……」

「だから人様に迷惑かけるなつていつただろうが！－」

ツインテは泉にすかさずチヨップをお見舞いした。

痛そーだな、アレは。

「ま、あとにかくお弁当忘れて困つてたんデショ？..」

泉は涙目で頭を押さえながらそう言つてきた。

まあ実際そつなんだけど。

泉は自分の弁当のフタに適当におかずを盛り、オレに渡した。

「はー。ちやんと翻りばしも付けてあげたから」

「……悪い」

盛られている量は少ないが文句を言える立場じゃない。
有り難く頂戴し、手を付けようとする。が、

「はー」

「いいのか？　えっと……」

“かがみ”よ。柊かがみ

「悪いな、柊

柊は弁当からこいつかのおかずをオレの皿に乗せた。

「じゃあ、私のもあげる」

そう言つてリボンのヤツもおかずを乗せた。

「お前は……」

「私は“柊つかさ”だよ?」

「柊……？」

「うん。お姉ちゃんとは姉妹なんだ」

お姉ちゃんて」とはいひ方が妹か。

ややこしいな。

「私も差し上げます。お口に合えばよいところのですが……

「えつと……お前は?」

“高良みゆき”と申します。以後よろしくお願ひしますね

「あ、ああ……」

とりあえず、オレは皿についた卵焼きに手を付けた。
「……うまー」

「お~、ホント?　いや~作った甲斐があったヨ!」

泉はそう言つてバシバシとオレの肩を叩く。

……意外と痛いんだが。

寄せ集め弁当もすっかり無くなり、オレは立ち上がる。

「悪いな。『駆走様』

「むうー。倉場君たら冷たいんだからー」

お前に言われる筋合いはねえよ。

オレの勝手だろ。

「せつかく女の子がこんないつぺんに話しかけてるんだからー。ち
ょつとしたプチハーレムじやん?」

「生憎だがオレはハーレムを築くような優男じやない」

オレの学ランの端を掴んでいる泉の手を払い、さつさと退散する。

かいと

たたかう

まほう

アイテム

逃げる (ペッ)

『かいとは逃げ出したー!』

『しかし回り込まれてしまつたー!』

なんて阿呆な展開は置いておいて。

泉はすばやく屋上の扉の前に立ち、オレの行く手を阻む。

「……おこ。いい加減にしないことぶつかのめしゃ……」

祖母の教え 第二十七条

『女子には優しくすべし。暴力なんて以ての外』

オレの拳は泉に当たることなく空を切る。

泉は不思議そうな顔でコシチを見ている。コシチミンナ

「どうしたの〜？」

「いや。自分の不甲斐なさ（以下略）」

「わっわ～。早く戻りや～」

オレは泉に文字通り背中を押されわっせの弁当を食つた場所へ連れ戻された。

運命を変える話 前編（後書き）

さて、次回の「りきすたは？」

かいとです。

まったく、アイシ「りオレ」に絡んできても「こい」とねえっての……。

次回、

「運命を変える話 後編」

運命を変える話 後編

いつもの昼休みよりも余分な体力を使った地獄の時間も過ぎ、下校時間。

オレはせつと自分の荷物を鞄に詰め、教室を出る。

ハズだつたんだがな。

「そりやつ

「！？」

オレの足に泉の足が引っかけられ、オレは盛大にすっ転ぶ。

「何すんだよ！」

「いや～。倉場君何も言わないでせつと帰る準備してたから止めるには最高のやり方かと」

「こんだけ非人道的なコトしといて何言ひてやがるー！？」

「ムズカシイ日本語ヨク分カラナーハ」

……口イツむかつく。

オレは泉のアホ毛をがつしりと掴んだ。

「おい、いい加減にしねえとこのアイデンティティ引っこ抜くぞ？」

「ちょ、マジ勘弁！？」

流石にこれは痛そだつたから取り止め。

「いいか。これに懲りたらオレに関わるのは止める」

「腐腐腐。私のしつこさは油汚れよりもひどいよ？」

「じゃあ、泡で落とすわ」

オレは何故か水道の所に置いてあつた泡のチラを盛大に泡立たせ泉の頭をわしゃわしゃといじる。

「ちよおお！ 何すんのー？」「

「お密様ー、かゆい所は『わこませんかー?』

と、微妙に顔こぼしてコンドームは終了。

軌道修正。

「とにかく、もうオレに関わるなー!」

「えー、いいじゃん」

「ええい! 放せ!」

オレは掴みかかつてきた泉を振り払い、下駄箱へと向かった。

「はあ……。今日は無駄に疲れたな……」

パカッと下駄箱の扉を開き、靴を取り出せません。

何故かつて?

そこに靴がないからやーー!

……流石にオレでも靴を履かないで家を出るとこいつ愚行は犯しちゃ
いなさい。

・ ·

(= = = .) ハハハ

(。 。) ハツチミンナ!

そんな泉の手にはオレの靴が。

「……」

どっちから動いたんだろうか。
オレも泉も猛ダッシュで鬼ごっこ。

そんな感じが5分。

3-C前に差し掛かった。

「あ、こなたー。帰るわよ~」

柊姉……だけ？

が泉に向かって手を振っている。
泉はその下をひょいとぐぐり抜ける。
もちろんそれは泉が小さいからできるひとことであってオレにはそこまでの素早さはありません。

「げふっ！！」

「！？」

柊姉がオレの首にラリアットを入れる形になつた。

「…………！」

首を押されて悶絶。

「えっと、なんか……ゴメンね？」

「いい……気にすんな……」

まだ痛む首を押されて立ち上がる。

とにかくこれ以上体力を使うのは無謀と考え踵を帰して家に

帰れません。靴が無いんだつた。

つて

「元はと言えば泉のせいだろーがあ！」

ビシツ、と泉を指さす。

「ん~。でも追いつけなかつた倉場君も悪いよねえ？」

……そう言われるとそうです。

「だから人に迷惑をかけるな！！」

この事件は終姉の鉄拳により收拾がついた。

「ホンッつつてにゴメン！－」

「あー、もういいって」

もう何度も分からぬ終姉の謝罪を受け流しつつも歩く。さつきのラリアットの詫びにオレになんか奢るらしい。

オレとしては早く解放してほしかつたが、ここでも祖母の教えが生きてしまつた。

マクド ルド

値段や満足感からここに決まり、俺たちは店内へ。

オレはチーズバーガーとマック シェイクを奢つて貰つた。

コイツらと食事というのは気にくわなかつたが今夜の食費が浮くの

は嬉しい事だ。

親戚たちの援助で家計を支えているが流石にそれも多い。そう考えればこういうのはいいかもな。
とりあえず席について早速チーズバーガーにかぶりつく。
外食つて久しぶりだな。

半分くらい食つたとき、オレは自分へ向く4つの生暖かい視線に気が付く。

「……なんだ？」

「いや～。倉場君です」に幸せそうに食べるな～、って思つて
「そうね。お昼の時もそつだつたかも」
「うんうん。見るとすっごく嬉しそうだもん」
「そうですね。食物に対して感謝して食べている感じです」
「そうか……？」

幸せ、か……。

そんなもののずっと前に忘れちまつたな……。

でも、幸せはこんなものだつたかも、と

少しだけ、覚えていん……。

運命を変える話 後編（後書き）

さて次回の「らきすたは？」

こなたです。

むむう、倉場君はなかなかムズカシイ人みたいだねえ。攻略も大変だよ……。

次回、

「思いも寄らない展開」

思いも寄らない展開

「ただいま……」「

なんて柄にもなく言つてみる。
返事なんてあるはずがない。
誰もいのいのだから。

そもそもオレが祖母の元で育つたのだつて、
両親の死が原因だ。

幼かつたオレは事故の後、間もなく祖母に引き取られた。

だつたろ? うか?

まあ、そんな昔のことはどうでもいいけどな。

適当に鞄を放り投げて着替えを取り出し、風呂へ直行する。

じぱりくおまちくだわー……。

「あ~すつきり」

風呂はいいな。

こつこうときは風呂上がりの牛乳でも飲んで更にすつきり……

「……ない

そうだ。

今日、夕飯の材料と一緒に買おうと思つてたんだ。
でも今日はアイツらがいたから忘れて帰つて……。

オレは何となく諦めきれなくてコンビニへと向かった。

コンビニって結構高いんだよな。
スーパーだつたら凄く安いのに。

なんて思つてこむとオレの視界の端になんか店先でおひおひしてい
る少女が。

オレはしばりく迷つたが結局は祖母の教えがオレの意志よりも勝つ
てしまい、しかたなく話しかける。

「おい」

「ひやうー?」

「つて、スマン。驚かせたな……」

「い、いいえ。私が勝手に吃驚しちゃつただけで……」

見たところ小学生ぐらいの少女だ。

コンビニのレジ袋を持っている所を見るとたぶんオレと同じ心情だ
るわ。

「どうした? 家が分かんなくなつたか?」

「うう、実はそうなんです……。引っ越してきたばかりで」

「そつか……。オレもお前の家を知つてれば送るんだけどな……」

「そんな! 悪いですし、お姉ちゃんに電話して迎えに来て貰おう
かなつて思つてたんです!」

「だけどなあ……」

いくら何でもこんな遅い時間に女の子が一人つてのもな。

「お前、家の住所とかは分かつてるのか?」

「はい……一応」

「何処?」

「えつと、町の番地です」

「近いな……。じゃ、オレ結構分かるから送つてこつてやるよ」

「ええ!? いいんですか……?」

「いいよ、今もここに帰つたてどうせ氣になるしな、行くハセオレは適当に呑嚥してその少女を連れて目的地を田指した。

「お前、名前は？」

“小早川ゆたか”です

「そこか」

「お兄さんには、」

卷之三

小屏三才小鏡をか

そうしてゐ間に俺たちは目的の場所へ着いた。

卷之三

「いや、気にすんな。帰れてよかつたな」

「はい！」

「ね～。おーちゃん、お歸り～」

この声は

誰かと思えば倉場君じゃないかい？」

田もがつたな。

「あれ?
お姉ちゃん、この人と知り合いなの?」

「まあね」。同じクラスだし

「それじゃあこの人がお姉ちゃんが言つてた人なんだね。それならお礼もしやすいね」

「お礼つてゆーちゃん、どうかしたの？」

「うん。家が分からなくて倉場さんに送つてもらつたんだ
ちよ、あんま余計なこと言つたん！」

「へえ～（＝　＝　・）」

ちよ！ ほり、あの顔しやがつた！！

その後、オレは泉家へ強制連行。

「おじや まします……」

オレも他人の家にすかずかと上がるような嫌なヤツじやないわ……。

来たくて来たワケじやないけどな！！（ここ重要）

「いやあ。倉場君にもそんな一面があつたんだねえ」

「なんだよ」

オレは出されたお茶を人啜り。

「まさかゆーちゃんみたいな娘を軟派しようなんてさ（＝　＝　・）」

「ぶつ！」

しまつた！ 泉のヤツ、よりもよつてそんな思考に行き着きやが
つた！！

「違う！ 断じて違う…！」

「あ～ハイハイ」

「信じてねえ…！」

なんてことだ……。

オレはこんなヤツに生まれて初めて弱みを……

握られてしまつた……。

思いも寄らない展開（後書き）

それで次回の「らき すたは？」

かがみです。

なーんか昨日と今日でこなたと倉場君の距離感近くなつてない？

次回、

「握られた弱みとアホ毛」

握られた弱みとアホ毛

「もう朝か……」

結局、昨夜はなかなか泉家から帰ることができずオレが自宅に着いたのは12時をとっくに過ぎたことだった。

「ほらほら。さつやと顔を洗って」はん食べなよ

「あ～はいはい」

促され、洗面所で顔を洗う。

やっぱり目覚めるな。

テーブルの上には「飯にみそ汁に焼き魚」と典型的な朝食が並んでいた。

「お、美味そうだな」

「まあね～、気合い入れて作ったからネ」

「じゃ、いただきます」

「いただきま～す」

オレは違和感に気付き、目の前のアホ毛をがつしりと掴んだ。

「何してんだお前」

「いやあ、今日試しに来てみたらドア開いててや～」

泥棒とか来なくてよかつた……なんて思考はどうでもよくて
とりあえず目の前の問題だ。

「だからってお前はドアが開いてたら不法侵入するのが当たり前な
のか……？」

だんだんとアホ毛を握る力を強めていく。

「いやー、友達の家の鍵が開いてたら心配するでしょ？ 強盗とか入ったと思って」

「お前に心配される言われない」

「せっかく朝ご飯も作ってあげたのに〜」

「いらねえよ！」

まあ、ちやつかり頂いたんですけどね。

朝飯も終わり、学校へ行く。

いつもと違うのはオレの横に着いてくるチビだ。

「だー！ いい加減離れろって！..」

「えーいいじやん

「よくねえ！」

まったく……大体何でコイツは俺の家を知ってるんだ……。
なんてことを思案していたらオレの乗車する電車が来た。

「あ

「げえ

「おつはよー、かがみ、つかさ

「おつす、こなた

「おはよーこなちゃん

柊姉に妹。

なんてこった。泉だけでも対応がいっぽいいっぽいなのに更にコイ
ツらまで加わるとは……。

「おはよ、倉場君

「倉場君もおはよう

「……ああ、おはよう……」

オレは力なく返事を返し空いていた席に座る。

「随分お疲れね、何かあった？」

「別に……」

「倉場君は昨日は深夜アニメ見てたんだよね?
いや、疲れて見る気力もなかつた……」

その時、かがみとつかさは（見てるのか……）と思つた。

教室に入ると高良が挨拶をしてきた。

オレは適当に返し、わざと席に着く。

「ねえねえ倉場君」

「何だよ……」

「今日の昼休みは暇?」

「暇じやねえ」

「どうせまた本読むんでしょ?」

「やうだけど?」

「じゃあ一緒に飯食べよつーいよな? 答えは聞いてない

——

「ちよ、聞けよー。」

かがみ side

朝、教室に入るなりこなたは倉場君に話しかけに行つた。
ていうか朝も一緒に登校してきたような……?

それに倉場君も昨日とくらべて滅茶苦茶馴染んでるし……。
やつぱり何かあつたのかしら?

「お姉ちゃん、どうしたの?」

「え? いや、こなたと倉場君が急に仲良くなつたなって思つて
……」

私がその顔つとつかれとおゆきもせつを見つめつつも頷いてくる。

「確かに~」

「仲がいこ」とはよことですね

「まあ、やうなんだけどさ……」
だからといってあの一匹狼のような氣を出していた倉場君が一田で
馴染むとは思えない。

なにがあつたのかしら……？

かいと side

結局あのあともしつこく迫られ、昼食と一緒に食べる事になつた。
今日は教室の一 角で食べる事になつたらしい。

ちなみにオレの弁当は今朝に泉が用意していた（オレの家で）弁当

だ。

まったく、勝手に人の家に上がってなにしてんだ……。

でも、泉は料理が上手いみたいだな。
現にこの弁当もほとんど手作りらしいしな。

そんな泉手製弁当を見て終姉は感嘆の声を上げる。

「へえ、アンタって料理できるのね。意外だわ」

「少しくらいはできるな。まあ、これはオレじゃなくて泉が作った
んだけど」

「　　・・・・・・・・・・・・」

なんで「イツら一斉に黙り込むんだ?

「こ～な～た～？」

「な、なんデシヨ、かがみサン?」

「さてはアンタ……勝手に押し入ったんじゃないでしょ?うねえ……

?」

「そ、ソンナワケ……ナイデスヨ?」

「ホントかしら?」

柊姉はちらりとオレを見る。

どうやら返事を待つて いるらしい。

「どちらかと言えば無理矢理押し入られたな」

「ちょ！ 裏切り者！！」

「またアンタわ！！」

そう言うと柊姉は泉のこめかみにグリグリと拳を入れる。

「ちょ、洒落になつてないつて～～！」

そんな泉の姿が可笑しくて

オレは自分では気付かなかつたけど

笑っていたんだ。

壇上 「弱みとアホ毛（後書き）」

さて次回の「弱み」とアホ毛は？

つかさです。

だんだん倉場君とも仲良くなってきた気がするなあ。でも明日からお休みだからしばらく会えないんだよね。何やつてるのかなあ？

次回、「面倒なヤツ」

面倒なヤツら

つづつと朝か

今日は田曜で休みだな

ついには、あの五月蠅い連中の相手をしなくても済むワケだ。
久々のゆっくりした朝に平和を感じながら軽い朝食を用意する。
あれから泉が毎朝来てゆっくりするどころではなかつた）

「へえ。しばらく来ないウチにだいぶ増えたな」

ここはゲーラズ。

じはなく彦を出さない。子は随分と新干が出ていた。少し

オレは新刊の本をいくつか取つてレジへと向かつた。

କୁଳ

オレは言われた金額を財布から抜き取り、店員に渡す。本を受け取り、店を出ようとした

の
だ
が。

「あつれい?
おかしいなー

「どうしたネ、ひよりん？」

いやお金が少し足りないみたいになんてよれ

もう一人は外国人の人だな。

会話の内容からすると眼鏡の方が金が足りないようだ。

「どうしまスカ？」

「ん~。しょうがないツス、これは諦めるツス」

「良かつたら使え」

オレは財布から千円札を抜き取つて少女に渡す。

「え？ えつと……いいんスか？」

「あー。いいよ、気にするな」

オレはそれだけ言つとさつとその場を離れた。

が。

「まあまあ、スコしきらにはマツつてくださいナ？」

外国人さんに襟を捕まれ、逃げることができなくなつてしまつた。

余談だが『外人さん』は差別用語だからできるだけ使つないよ。お兄さんとの約束だぞ？

ソイツの買い物が終わり、オレは一つの喫茶店の前に連れてこられた。

（なんか最近ひどく流されている気が……）

なーんて思つても時既に遅し、だ。

それから数分待つと一人の少女がこちらに来た。

「おー、先輩。お待ちしてたつス」

「やー、メンゴメンゴ。やまとを引っ張つてぐるのに手間取つちゃつて」

その少女は肌の色が少し黒い背の高い少女だ。

もう一人はソイツより少し低いくらいのボニー・テールが2つに分かれた髪型をしている。

「ちょっと、こう? いきなりこんな所に呼び出して何のつもり?」

「いや、ひょりんがわあ。少しばっかりお願ひしたいことがあるみ

たいでね？」

その後もなんかソイツ等で「ソレ」と話している。
なんなんだよ一体……。

その後、なんだかんだの無理矢理な流れで誰かの家に連れてこられた。

何奴の家かは知らんが見知らぬヤツをいきなり連れてくるなんて何者だ？

すると眼鏡の少女はスケッチブックを取り出し、何やら書き始めた。ちなみに外国人の方は棚にあるマンガをいくつか取りだして読み始めている。

「お待たせ～。お兄ちゃんから借りてきたよっ！」

するとさつきの背の高い少し色黒のヤツは何着かの服を持ってきた。ただ問題なのはそれらがBAS RAなりハヒなり何なりのアニメやゲーム関連のコスプレ衣装だ。

「あー。その前にちょっと聞きたいんだがお前達は何者だ……？」

「おつと申し遅れましたね。私は“八坂こう”です。どーぞよろしく

く

背が高いのは八坂、ね。

「私は“田村ひより”」

「ツス」

眼鏡が田村、と。

「ワタシは“パトリシア＝マーテイン”といいマス！ ようしくね！」

外国人さんはパトリシアか。

「……私は“永森やまと”です！」

ボニー・テールは永森ね。

「それで、そつちはどちら様でしょうか？」

「あー、……倉場かいとだ」

「こういっのは最早抵抗するだけで無駄だ。

その辺はもうここ数日絡みっぱなしの泉で学習済みだ。

「それで？　いい加減にオレを解放してくれ」

「まあまあ、急がない急がない。こっちの指定したことをしてくれたらすぐに帰してあげますから」

「分かった分かった」

「そうです！　やまとを恋人だと思つて……！」

「おお！　なかなかいいッスよ！　次のイメージがどんどん沸き上がつてくるッス！！」

「かなりイイデス！　もつとエロギにシユーチューリングクダサイ！」

！」

オレが今、何をさせられていると思う？

絵のモデルだつてサ！（泣）

つて、いくら何でもこれはマズイだろ。

お子様にお見せできない感じになりつつあるよ。モザイクかけられるだろ。

みたいのが各衣装で行われ、オレは精神に大打撃を受けた。

「ハア……いろんな意味で疲れたな……」

「ごめんなさい……。こつが迷惑をかけて」

「いや、永森は悪くないさ……」

どつかかと言えば「イツも被害者だからな。

アイツら人に容赦なく指示出して来るもんなあ……。

何度も「ちょ、おま、自重！」って叫んだか分からん。

「いやー。ありがとうございますね。おかげで次の『ミケ』の題材が揃いそうです」

……What?

「『ミケ』って、もしかして売るつもりか……？」

「ええ。倉場さんは格好いいから変えようがないっス。永森先輩もなかなかでしたよ？」

「ちょ、田村さん！？ あなた一体何考えて……？」

「いいじゃないデスカ。『ウ』にいれば『ウ』にシタガウモノですよ？」

「そうやつ。業に入れなきや！」

「『手』違つ……！」

世の中にはいろんなヤツがいるモンだな……。

でも、悪い気はしなかつたかもな。

| 画面なヤツら（後書き）

さて、次回の流れ すたは？

みゆきです。

倉場さんも随分とみなさんと馴染んでいらっしゃいますね。そういう
えばさつきの休み時間に保健室に向かわれておりました
悪いのでしょうか？

次回、
「抜け出つの一時」

抜け出しの一時

「ちわーす」

「はい……つて倉場君？ またサボリですか？」

「鬱な気分なだけです」

2時間目が終わってオレは保健室へ出向いていた。
別に特別具合が悪いワケじゃない。

先生の言うとおりサボリだ。

オレは特等席の窓際のベッドに腰掛ける。

「もう去年や一昨年と合わせてもかなりの時間来てますよ？ 少し
は授業に出たらどうですか？」

「必要な単位は取りますよ。あとは面倒くさいだけです」

養護教諭の“天原ふゆき”先生だ。

口ではそんなことを言っているがオレの行動をあまり咎めようとは
しない。

思えばこの人が高校で初めてまともに会話した人かもしれない。
オレはゴロリとベッドに身を投げて天井を見る。

ふと保健室のドアが開き、一人の人物が入ってくる。

見た目はほとんど泉と変わらない程の身長で眼鏡をしている。

陵桜学園の生物担当の“桜庭ひかる”先生。

3年C組の担任で天原先生の幼なじみ。こんなナリでもれつきとした大人だ。

「倉場。今、とっても失礼なことを考えなかつたか？」

「イエ、ナニモ」

「まあいい。ふゆき、休ませてくれ」

「アナタもですか？ 倉場君はともかくひかるさんは教師なのです

から控えた方がよろしいのでは……？」

「いーだろ、別に」

そう言つて桜庭先生はさつさとベッドに居座つた。

天原先生は少し溜息をつくと再び事務の仕事に戻つた。

「そういうえば先生。最近はいつも端のベッド塞がつてますけど、いつも誰かいるんですか？」

「ええ。1年生の子なのですからね、体調を崩しがちなんですよ」
へえ。3年になつて2、3回来たがその時はいつも塞がつていて変
だと思つたんだ。

だつてそこの端のところ、あんまり人気じやないしな。

再びドアが開き、今度は一人の生徒が入つてくる。

「あの……天原先生」

「あら、岩崎さん？ 小早川さんならまだ寝ていますよ？」

「はい。少し様子を見に来ただけですから」

……小早川？

最近その名前を聞いた気がするがどこだつたかな……。

「みなみちゃん……？」

端のベッドのカーテンから一人の生徒が顔を出していた。

ソイツは高校生という年齢には釣り合わない身長の
小早川ゆたかだった。

「あれ、倉場先輩？」

「あ、ああ。久しぶり……」

オレはぎこちなく手を振る。

そのオレの行動に桜庭先生と天原先生は随分と驚いた表情になつた。

「おお。倉場が他人の名前を覚えているとはな……」

「ひかるさん……。ですが、倉場君もお友達がいたみたいでよかったですね」

「ちよ、友達ってほどじやなくて………」

まあ落ち着け、オレ。

ここは保健室だ。騒いでも仕方ない。

小早川はオレの方を見てはにかむように笑った。

「倉場先輩、あの時はありがとうございました」

そう言って小早川はペコリとお辞儀をした。

「あの、事情は分かりませんがゆたかを助けてくれてありがとうございます」

もう一人の生徒の方もオレにペコリとお辞儀する。

「紹介しますね。友達の“岩崎みなみ”ちゃんです」

「岩崎みなみです。よろしくお願ひします。えつと……」

「……倉場かいとだ」

……そうだ。

もう泉に会つてからオレの平穏な日常は狂い始めてたんだ。
もうなるようになれ、だ。

小早川は具合が良くなつたらじしく岩崎と一緒に教室へ戻つていつた。

「あ～～～、くそ！」

オレは自分で整理のつかない気持ちを投げ出すようにベッドに倒れ込みどうしようもない歯がゆさに頭をガシガシと掻いた。

そんなオレを桜庭先生と天原先生は暖かい目で見ていた。

抜け出しひ一時（後書き）

それで次回の「らきすたは？」

ゆたかです。

倉場先輩を部室棟の前で見たんだけど一体何をしていたのかなあ。
お姉ちゃんの話だと部活には入ってないって言つてたし……。

次回、

「ア一一研へよつひん！」

アーニ研くよりんやー！

「 今ちに来るのは久しぶりだな……」
オレが来ているのは部室棟。

文化系の部室がある所で昼休みにこんな所に来るヤツはほとんどいない。

つまり絶好の昼寝場所と言いつことだ。

こういう天気のいい日は屋上で寝るに限るな。
なんてことを思いながら歩いているとオレの肩にポン、と手が置かれた。

「あつれ？ 倉場さんじやないすか？」

「 ……八坂」

なんてこつた。

まさか「マイツ」が陵桜の生徒だったのか。

「いやー。先輩だったんですねえ、意外や意外ですよ」

「オレもだよ……」

前回の経験から「マイツ」に関わると口クな事がないのくらいは分かる。

なんでこいつの名前を覚えてるかつて？

忘れられるわけねえだろーが！！

「 それはそうとお前はなんでここにいるんだ？」

「 ん？ それは私がアーニ研の部長だからですよ」

答えになつてねえよ。

部長つてだけでここに来る理由にはなつてない。

「 あとは暇つぶしです」

「 そつか。じゃ、オレは屋上行くから」

オレはやつをととの場を離れ

「そうだ！ 先輩、どうせですからお茶でも如何ですか？」
られませんでした。

ちょ、八坂。腕握るな握力強すぎイタイイタイイタイつて！

場所移動描写

八坂に連れてこられた部室。

ドアにはでかでかと『アニメ研究会』と書かれている。

「やつほー、来たよー！」

乱暴にドアを開けて八坂は叫ぶ。
つて、叫ぶつて事は何人かいるつてことだよな。

「あれ？ 倉場さんじゃないスか」

「田村か……」

例の事件の犯人その2、田村だ。

やはりといふか何といふか陵櫻の生徒だつたんだな。

「一応聞いておくがやつぱりパトリシアも永森もココにいるんだな
？」

「あー、いや。やまとは陵櫻じゃなくてフィオリナの方にいるんで
す」

フィオリナつてのは聖フィオリナ女学院のことだ。
かなりのお嬢様学校で学力もそれなりのレベルらしい。

「あれ？ 知らない人がいる～」

「そういう時はまず挨拶でしょ……」

ん？ 初めて見るヤツだな。

一人は髪を四つに束ねているヤツ。

もう一人は癖毛の髪で眼鏡をかけている。

「お、二人とも。紹介しとくな。先輩の倉場かいとさんだよ」なんか勝手に紹介されてるな。

「先輩、部員の“山辺たまき”と“毒島みく”です」「ど～も～。2年の山辺で～す」

「同じく毒島です。よろしく」

「……ああ……」

どうして世の中はいつも上手くいかないんだろうな。

オレは静かに人生を過ごしたいだけなのに……。

神つてのはどうもオレの意識に反した出来事を起すらしない。

『あの時』 だつて。

「先輩？」

「んあ？」

「お茶、どーぞ」

「あ、ああ。いただきます」

オレは八坂が淹れてくれた緑茶を啜る。「

「それはそつと、先輩はアニメとか興味あるんですか～？」

「え？」

山辺がいきなりそんなことを聞いてきた。

「まあ、少しば

「何に興味が？」

毒島も少し興味が出たらしく、オレに聞こえてきた。

結局、オレは昼休みが終わるまでそこいつ等と話をすることになった。
何とも言えない感情を抱えたまま……

アーニ研くよりいじやー！（後書き）

さて、次回のらき すたは？

みなみです。

偶然3年生の教室の前を通りたら倉場先輩が昼食をとっていました。
随分と大所帯でしたね……。

次回、

「元気娘や聖人2号も先生も」

元気娘や聖人2号も先生も

「倉場くーん、『飯食べよー?』

「……」

無視だ。

このテのヤツらは反応すればそこから流されるに決まっている。
だつたら無視すればいい話だ。

「ねえ、無視?」

「……」

「聞いてる?」

「……」

「……エロガッパ

「誰がエロガッパだ!-!」

しまった。

もう乗せられた。

「と、いうわけで『飯食べよー?』

「はあ……。もう好きにしてくれ……」

「やつたー! つかかー、みゆきわーん、許可取れたよー

そう言つて泉は柊妹と高良をこつちに呼んだ。

2人は近くの席から椅子を借りてオレの席に近づける。

「おーす」

「お、かがみん」

「かがみん言うな」

しばらくすると柊姉も来た。

ああ、もうー、なんでこう次から次へと!

「なあなあ、柊。この男誰だ?」

「初めて見る子ね? 新しいお友達?」

また増えた……。
ショートカットのヤツとロングでカチューシャで前髪を上げてるやつだ。

「トイツらも遠慮無く誰彼構わず連れて来やがって……。
一度くらい強く言った方がいいのだろうか?
……いや、トイツらはいくら強く言つても聞かないだろうな。
特に泉はこの性格だからな。

「倉場君。こいつちの馬鹿っぽいのが田下部。こいつちが峰岸よ。2人とも、この人は倉場かいと君」
「馬鹿っぽいはねえだろ~。私は“田下部みせお”だぜ、よろしくな」
「柊ひやんの友達の“峰岸あやの”です。よろしくね、倉場君?」
「……倉場だ。……よろしく……」

別によるじくするまで仲良くするワケじゃないんだが。
いわゆる社交辞令だな。

軽い自己紹介が終わり、3人も席に着く。

各自弁当を広げ、箸を進める。

「なあなあ、倉場はちよつと前までいなかつたけど何で仲良くなつたん?」

「仲良くしているつもりはないが
「ああん、そんな連れないと言わないでよ~」「
「だあーーー! 離れる!」

この2人は同時に相手すると面倒だな。

泉1人でも大変だからな。類は友を呼ぶつてな。

「くすくす。倉場君つて面白いね」

「おー、峰岸だっけか? こいつ……田下部? を相手してくれ。オ

レ一人じや対処できん」

「みさちやん、倉場君のこと気に入つたみたい」

「な～、あやの。「イツすげえ面白いぜ？」」

なんてことをオレをいじりながら言つてゐる。

なんかこの2人も見るとホントの姉妹みたいだな。

「お、なんや随分賑やかやな？」

「お、黒井先生」

この関西弁は確かに担任の“黒井ななこ”先生だつたか？

先生はオレ等を何度も見ながらにやにやと笑う。

「にしても、倉場は早速ハーレムを築いたんやなあ。このクラスに限らずお隣のクラスまでもか」

「違いますよ……」

「でも、倉場君。初めは嫌がつてたけど最近は一緒にお昼食べても何も言わなくなつたね」

「ええ。段々とこのクラスに馴染んでいつて貰えていいよつて何よりです」

違つんだ……。

オレは馴染んだんぢゃない。

あんた等には何か悪い気がして言えないだけなんだあーーー泉とか柊姉には思つていることを言えるんだがなーーー。

何とも言えない歯がゆさにオレは思わず頭を搔きむしつた。

「倉場君？ あんまりそんなことすると禿げちゃうよっ。」

「やうさせてるのはどこの何奴だよ……！」

まあ、そんな感じで話しているせいで昼休み終了直前に弁当をかき込むハメになつた。

たつた数日で随分と色々なヤツを見てきたわけだ。

なんだろうな。
この気持ちは……
。

元気娘や聖人2号も先生も（後書き）

さて、次回の「らきすたは」は？

ひよりです。

4月もあつという間に半分過ぎちゃったツスね。そういうえば倉場先輩も最近私達に何も言わなくなってきたような……？

次回、

「諦めた感情」

諦めた感情

新しい学年になつて半月が過ぎた。

今回があまりに短時間にインパクトのある事件が多くすぎたな……。
なんてことを思っても後悔先に立たずだ。
そもそも泉達があんなになってるのもオレが悪いんだ。
新学期が始まつたあの日、氣まぐれでカードを拾つてしまつたオレ
が。

あの時、気まぐれを起こさなかつたらオレは今でも一人でいただ
ろうか?

「はあ……」

何
で
オ
レ
が

「アイツらの分まで弁当なんて作つて行かなきやならないんだあ……」

まあ、何でオレがアイツらを含め5人分の弁当を作つてゐるかといふのは今日の昼まで遡る。

ついで回想シーン。

最早定着しつつある五人での昼食。

まず泉が一番に来てその後に柊妹、高良そして最後に柊姉と言つた
感じだ。

いつもどおりに適当な話をしつつ、箸を進める。

「でさあ、今日はアイテムドロップがウハウハでさ~」

「はいはい」

オレは泉の話に適当に相づちを打ち、ハンバーグを囁く。

「そういえば、つぐづく思つたけど倉場君て料理上手いのね。一人暮らしなんでしょ?」

「まーな

「スゴイねえ。私一人じゃきつとできないよ~」

「まあ、何とかなってるけどな」

「ですが既に自立した生活ができるといふのは素晴らしいこと

です」

「別にそんなんじゃねーよ」

これらもほとんど適当に答えているだけだ。

いちいち話題を上げるのも面倒だからな。

「じゃあさ、倉場君。私達にお弁当作つてみてよ。倉場君の実力、気になるしね~」

「はいはい

てな具合だ。

その後は色々と口車に乗せられて現在に至る。

まあ、普通ならシカトするんだがな。

思つた通りというか、何というか、やはり祖母の教えが生き、5人分用意しているわけだ。

平穀な日常なんて来そうにないな……。

そんなことを思いつつ、残りの準備を済ませてオレは早々に床につ

いた。

翌日。

「おお～。倉場君、おはよ～」

「倉場君、おはよ～」

「おはよ～ござります。倉場さん」

「ああ、おはよ～」

オレは3人に挨拶を返し、席に座る。

ちなみに最近席替えをしたのでオレの周りは

— オレ 泉
— 桜妹 高良

とこう感じに授業中もゆっくりできない状況に陥っている。

「やついえばや～、倉場君。お弁当作つてきた?」

「お前が作れつて言つたんだろ? 一応作つてきたよ」

オレは鞄の中から弁当箱を取りだし、各自に渡す。

泉は受け取った弁当を早速開いている。

「おお! 何かスゴイ家庭的なお弁当だね!」

泉は感嘆の声を上げる。

桜妹と高良も弁当を見て「「おお……」」と驚いている。
ま、いつもよりは少し豪華だからな。

オレは「マイツらに食わせるために豪華にしたのか?
いや、気まぐれだと
思いたい。

「そーいえばさあ

「ん? なんだ?」

泉は急に何かを思い出したように口を開いた。

「流石に2週間近く一緒にいるわけだし、名字呼びつてのもおかしくない?」

「……おかしくないな

「えー? おかしいよ」

何を言い出すかと思えば……。

オレはこのままでいいけどな。

「ねえ、つかともううつうつよね?」

「えー、あー、うん。うつだね!」

お前もか。

「みゆきさんはどう?」

「私も、できればその方がよいと思こますね

マジでか。

「ところがで、3対1だよ? ビリする?..」

「ビリもしねえよ」

……なんで一同しゅんとなるんだ。

「お~す、みんなどうしたの?..」

柊姉が来た。

状況説明中

「な~るほど。じゃあ私はこなた達に一票

「んなつ!..」

「だつていつまでも姉とか妹とかで呼ばれても不便だしね

そういう理由か!

でもまあ、泉達はともかく柊姉妹はそつだよな……。

「とうつわけで！　名前呼び頑張ってね！　かいと君ーーー。」

……はあ。

仕方ないな……。

「分かったよ……。」なた、かがみ、つかさ・みゆき「

オレはもう一人でいることを諦めたんだ。

自分の罪の意識を段々と忘れて……

諦めた感情（後書き）

さて、次回の「らきすたは？」

パーティでス！

カイトはどうしてもギャルゲのショジンコウですヨー。ヨコクはジャンケンドシめるモノデス。ジャンケンポン、ウフフフフ

次回、「実力をこの辺に」

実力をこの目に

4月も後半に差し掛かった。

この時期、3年は実力テストというモノがある。

そしてテスト期間なるものが存在し、3年は早い時間の帰宅ができるのだ。

ついわけで早めの授業が終わり、下校時間となる。

「つ～～～！ いへり時間が短いって言つてもやつぱり授業は面倒だよなあ……」

「あ～～！ その気持ちはよく分かる！」

そう言つてこなたとがつしりと手を結ぶ。なんだこのノリは。

「うう～～。私は全然勉強できていないよお」

つかさはそんなことを言つて泣いている。

「みゆきはどうだ？」

「私は少し復習できていないところがありますね
なるほど。」

「かがみは？」

「私はまあまあよ。あと何回か通ればできるわね」

「お前らはいいよな。オレなんか全然できていなかせ」

なんとか勉強しようとは思うんだけどな。

なぜかいつも集中が乱れてしまつ……。

「やつぱりPDCつけたまま勉強するのはダメだな……」

「そんなことしてるとか、アンタわつー」

「やつぱりか……。

今日辺りからPDCは封印だな。

「ねえねえ、みんな今日これからヒマ？

こなたは唐突にそんなことを聞いてきた。

「オレは特に何もないな」

「同じく」

「私もないよ？」

「はい。私もこれといった予定はないです」

「じゃあが、これからみんなで勉強会をしようついでに…」

「 つと・こんな感じか」

現在オレは家を掃除している。

色々と考慮した結果、勉強会はウチで開催することになった。

そんなわけでしばらくしていなかつた掃除を急いでしているワケだ。
こなた達は一度、家にもどつて準備をしてから来るらしい。

「お茶の買い置きは大丈夫だな。あとは待つだけか……」

ピンポーン

インター ホンが鳴った。

「つと、来たか」

オレは急いで玄関へ向かう。

「やほ~」

「来たわよ~」

「こんにちは~」

「おう、いらっしゃい」

こなたにかがみにつかさか。
みゆきはいないみたいだな?

「あ~、みゆきさんは遠いからね。少し遅れるよ

「やうか。じゃあ、先に始めとくか

しばらく勉強しているとまたインター ホンが鳴る。

「こたにちは、かいとさん」

「みゆきか。これで全員だな」

全員集まり、本格的に勉強会を始める。

「えーっと、ここのはどうすればいいんだ?」

「あ、そこは結構難しいところですね」

「ああ、もう! 何で数学なんてあるんだ……」

「あら、かいと君って数学苦手なのね」

「まあ、おかげで毎年夏休みには補修だよ

「つー。私も数学苦手だよお」

「まあまあ、つかせ。これとなつたら一夜漬けで乗り切らうよ」

「それも無理……」

「あんた達も少しほまともに勉強しなさいよ……」

なんて他愛もない話をしながらテスト勉強をする。

一見、何もできてないよう感じたけど意外と身に付いたもんだ。

来たる実力テストの日!

は、すつ飛ばして。

本日は実力テストの結果が出る日だ。

「『陵桜学園は一学年10クラス以上もあるマンモス校のため、張り出される順位表は何時もある。」

そしてその前に「これまたずつひとつづら」と生徒達の壁が展開されていく。

そんなわけで自分の名前を捗すのも一苦労なわけだ。

「お、みゆき。3番じゃないか」

チラリと見えた名前にオレは驚きの声を上げる。

「スゴイじゃないか！」

「いえ。そんなことは……」

「みゆきはいつも上位だから捗すの簡単なのよねー」

「でも、つかさは後ろから捗すとすぐ見つかるんだよねー」

「こなちゅーん。ホントかもしれないけどあんまり言わないでえ……」

そんなつかさを同情しつつ、他の名前も捗す。

「かがみは……59位か。なかなかだなー！」

「あはは……。そんなことないわよ」

「照れるかがみん萌えー」

「萌え言うな！」

先に次を見ていたつかさは「あ」と声を上げる。

「かいと君は82位だよー」

「どれどれ……ホントだな」

「82位か。まあまだな。」

いつもならもつと後の順位なんだけどな。

やっぱりコイツらと一緒に勉強したのが良かったのか……？

そんなことを思いつつ、残り2人の名前も捗す。

「300位を過ぎたな……」

「そうね……」

流石にここから後ろはヤバイ。

ちなみに300後半あたりは確実に補修組だ。

なんとしてもそれは避けてほしいな。

という思いも虚しく……。

「こなた……391位……つかれ……406位……」

まあ、何といふか……。

こなたとつかさの周りにはず～ん……と黒いオーラが浮いている。

流石にこれはかける言葉が見あたらない。

「うう～。また補修だよお……」

「面倒臭い……」

「げ、元気出してよ2人とも！」

「そ、そうですよ。気を確かに……」

「そうだぞ！ 次頑張ればいい！」

実力つてのはいつも目に見える形にされると凹むモンだな……。

実力をこの目に（後書き）

さて、次回のらき すたは?

こうです。

いやー、倉場先輩も変わりましたねえ。反応が以前とは別人ですよ。
また、やまとと一緒に会いに行こうかなー。

次回、

「お宅訪問・泉家 その1」

「こなた、今日ヒマか？」
昼飯中にオレはそんなことを聞いていた。

「ん~、まあヒマかな~」

「じゃあ、今日遊びに行つていいか?」

……………

アレ? 何で沈黙?

「いやー、かいと並びま。おとーさんには挨拶は早いでしょー?」
「なつ!~?」

「はー? 何!~? あんた達、付き合つてたワケ!~?」

「え!~? そうなの?」

「びつくりです~」

何かあらぬ誤解を生んでいる!

「ち、違つ!~ そういう意味じゃない!~」

「じゃあ、どういう意味?」

かがみは身を乗りだしてオレを睨んでいる。

かがみ様、田が怖いデスヨ……?~

「まあ、その……アレだ。お前達ともまあまあ仲良くなつたし?
家の場所くらい把握しといつかな? とか思つたり思わなかつたり

……?~

何故に所々疑問系?

しかしかがみはそれで納得してくれたよつでスッと身を引く。

「ま、まあお前達の家も訪問させて貰つと困つからひど。今回こな

たの家が近いからまたまだよ」「なーんだ、そういうこととかあ~

「うふふ。そういうことなら一つでも歓迎いたしますよ?~

よかつた……。

なんとか誤解は解けたな……。

「ん~、まあ来てもいいけどあんまり身の安全は保証できないな~」
「こなたは一瞬よからぬことを言つた気がするがよく分からなかつた。」

泉家

「結構大きな家だな……」

以前、小早川を送りとどけた際に見てはいたが『ひしまじまと
見るとやはりでかい。』

アイツがあんなにもオタグッズを沢山購入しているわけだ。
そんなことを思いながらチャイムを鳴らす。

『ほ~い、どちら様?』

「こなた、オレだ」

『はいは~い、今行くよ』

するとすぐにドアが開いた。

「こりひしゃ~い

「おう、お邪魔します」

出てきたのはいつも見慣れているこなたの顔だ。
その隣には

「ああ、小早川もコイツの家にいたんだったか」「

「先輩、こんにちは」

実家が陵桜から遠いため、親戚であるこなたの家に『ひしまじい』小早
川もオレを出迎えてくれた。

「よう。元気そうじやないか」

「はい。最近は大分調子も良くて……」

「お茶持つてきたよ~」

とりあえずこなたの持つてきたお茶を一啜り。

「なあ、こなた」

「ん~、どしたの?」

「オレまだお前の父さんと母さんに会つたこと無いんだが」「あー、うん……おかーさんはもういないよ?」

「え?」

「私が小さい頃に死んじゃつたんだって」「あ、そり……なのか」

こなたの気持ちは痛いほど分かる。

オレだって、あるのは幼い日の思い出だけ。父さんと母さんが、死んだ『あの日』。

「おとーさんは基本的に引き籠もりだからあんまり見ないかなー」「え! ? 引き籠もりなの! ?」

「えっとですね、おじさんは小説家なんですよ」

「へえ……小説! ?」

小説家ってのは成功する人は成功すると聞いたことはあるがまさかここまでとはな……。

さぞかし立派な人なんだろう。

なんてことを思つていると奥から作務衣を着たオッサンが出てきた。

「つーーー! こなた、お茶淹れてくれないか?」

「ん? おとーさん今田縫め切りじゃなかつたの?」

「そうだなー。夕方には出しに行かなきやな、つてその子は?」

オッサン……。

こなたは『おとーさん』と呼んでいるあたりからこの人はこなたの父親なんだろ? な……。

まあ、似てる。瓜二つと言つてもいいぐらいだ。

こなたのオッサンヴァージョンという感じ。

「なんか、失礼なこと考えてない?」

「イエ、ナニモ?」

こなたはオレをじと目で睨んでくる。

「でもいいけどおじさん無視してやるなよ。

「紹介するね、ウチのおとーさん。おとーさん、友達の倉場君だよ

「ども、倉場です」

「へ、そうか……。あくまで聞いておべが、うちの娘とはどうこつた関係で……？」

？ 一体何を聞いてくるかと思えば。

「まあ、友達ですけど……？」

「ほーう……本当か……？」

何故にそんな疑つてくるんだ？

オレ、何かしたかなあ。

「ほひ、おとーさんは締め切り近いんだから早く汁一こなたはおじさんを奥へと押しやる。

ヒテH。

ふう、と一息つきまた椅子に座るこなた。

「おとーさん、前に私に男友達ができたら抹殺する、とか言つてたなー」

「先に言えよ……」

オレの生命に危険が及ぶところだつただろ！

……まあ、大事にされてるつて事で、いいんだよな？

「こなた、親父さんのこと大事にしろよ？」

「でもあんまり優しくしても調子に乗るからねー」

「ほどほどにな」

やつぱりオッサンはほどほどに優しくすべきだな。

つけ上がるし。

うちの親父もそうだった……。

「つー」

「？ かこと君？」

「？」

「先輩？」

「……いや、ただの目眩だ」

血にまみれるオレの手。

そこに横たわっているのは……？

お宅訪問・泉家（後書き）

さて、次回のらきすたは？

やまとです。

先日、ふと気にかかるて鷺宮神社へお参りに行つたんです。季節はずれでしたからあまり人はいなかつたんですけど……。

次回、

「お宅訪問・柊家」

お伊訪問・終家 前編（前書き）

今回は2部構成にしたいと思つてこます。

お宅訪問・柊家 前編

恒例の友人達のお宅訪問だ。
まあ2回目だし何が恒例なのかは分からんがとにかく今日はかがみ
とつかさの家だ。

こなたの家からもあまり遠くなく電車でほんの少しだ。
オレなら自転車で行けるかもしね。

そんなことを思いながらインター ホンを鳴らす。

バタバタと荒い足音がしてドアが開いた。

「はいはい？ どちら様？」

見た感じはかがみやつかさより少し年上っぽい人だ。
顔の感じからしてかがみに似ているが。

「えつと……かがみさんとつかさんの友達の倉場です」
「ほう、私は終まつり。かがみとつかさの姉だよ」
「よろしくお願ひします」
「ま、上がりなよ」
「お邪魔します」

かがみとつかさの部屋は2階にあると聞き、階段へ向かう。
途中に居間があつてそこで一人の女性がテレビを見ていた。

「お邪魔します」
「あら、いらっしゃい」
「かがみさんとつかさんの友達の倉場です。よろしくお願ひしま
す」

「私は終みき。かがみ達のお母さんです」

「……（。 。 。）」

「どうかした？」

「お母さん……ですか？」

「ええ」

「お母さん……ですか。失礼しました」

「お母さん……」。

今時の母親はあんなにも若いのか?
いや……でもかがみの家は4姉妹つて聞いたぞ……。
てことは少なくともXX歳はいってるみな……。

なんてことを悶々と考えながら階段を上る。

KAGAMIと書いてあるプレートの掛かった部屋のドアをノックする。

「かがみー、来たぞ?」

「えつ！？　あ、こりゃしゃー！」

「おう」

とりあえず促されて部屋へと入る。

「ちょっとつかさも呼んでくるわね」

「分かった」

「言つておくけどくれぐれも　くれぐれも　部屋漁つたりしないで
よ」

（2回言つた……）

この時かいとは「何で2回言つのカナ？　何で2回言つのカナ？」
と思つたといつ。

まあ部屋なんか漁るヒマもなづかさが入室してきたわけだが。

「かいと君、いらっしゃ～～」

「かいと君、いらっしゃ～～」

「よつす。お邪魔してるぞ」

「ん？ つかさ、髪乱れたまんまだぞ？」

「ふえ！？」

「まったく、昨日夜更かしするからよ」「だつて～」

えへへ、と笑つて頬を搔く仕草をするつかさ。一体何をしていたんだろう。

「この子つたら夜中までずっとクッキー作つてたのよね」「だつてかいと君が来るつていうから食べて貰おうかな～って……」「へえ、ソイツは嬉しいじゃないか」

よく誤解されがちだがオレは結構甘い物は好きだ。嫌いなモノつていつたら人参だな。

アレは食えん。食べ物じやない。

「そういうことだから後で食べてあげてよ」「言われなくとも御馳走して貰うつもりだ」「アンタ結構図々しいわね……」

そう言つてアハハ……と談笑する。

やつぱりつかさの作つた物は美味しいな。

そんなことを思いつつ、また一つクッキーをほおばる。

「ところで、お前達の母親つて歳いくつだ？」

「……」

「……」

2人は顔を見合させる。

「それがさあ、私達がいくら聞いても教えてくれないの」

「うんうん、いつつもはぐらかされちゃうんだよねえ」

「ふうん……」

やつぱりオレには母親がいないからそういうのはよく分からんな……

…。

「ねえねえ、かいと君」

「ん？」

つかさは唐突にオレに声をかけた。

「今日の夜はヒマかなあ？」

「まあ、夕飯の準備くらいだが」

「だったら今日ウチで食べていかないと？」

「どうしたのよ、いきなり」

「あ、いや、かいと君一人暮らしだから大変だし寂しいかな～って思つて……」

……そうか。

つかさもつかさなりにオレのことを心配してくれてるのか。

「ああ、御馳走になるよ。でもいいのか？」

「大丈夫よ。元々大家族だもの、一人増えたぐらいで何も言いやしないわよ」

「じゃあ私、ちょっとお母さんに言つてくるね」

つかさは立ち上がり、部屋を出て行く。

「ホント、悪いな」

「いいのよ、困ったときはお互い様」

「……そうだな」

オレは久しぶりの大人数の夕食に僅かながら胸を躍らせていた。

お宅訪問・柊家 前編（後書き）

それで、次回の「らきすたは？」

みさおです。

あんだけ言つたに柊はまたチビッ子の方に行つちまつんだよなー。
この間も「善処する」って言つて流しまくつたし。

次回、

「お宅訪問・柊家 後編」

お祝訪問・柊家 後編

柊家で夕食を御馳走してくれたお礼に夕食の準備を手伝ひに来られた。

「倉場君、悪いんだけどこっちのお野菜切つて貰えるかしら?」

「はい、お安いご用ですよ」

包丁を拝借して一口サイズに切つていぐ。

このメニューだとこれは野菜サラダかな?

「倉場君はお料理上手いのねえ」

「ええ。オレ一人暮らしなんで弁当とかは自分で作つてます

「そうなの……。寂しくない?」

「慣れてますから」

切り終わつた野菜を器に移し、ハンバーグを火にかける。

「ふう……。あとは焼けるのを待つて……」

「倉場君、もう休んでいいわよ?」

「え、でも……」

「お客様に働かせるなんて悪いわ」

「……じゃあ、お言葉に甘えて。なんなら掃除か何かしましちゃうか

「?」

「くす。いいわよ、やつべつしてて?」

「はー」

「はー」

する事ないのでとりあえず居間に行く。

ちなみにかがみとつかさは近くのコンビニに行つている。

『ただいまー』

『ただいま』

?

男性と女性の声

多分父親とセウ一人の姉さんたる三な

「おや、来客か？」

「はじめまして、かがみさんとつかささんの友達の倉場かいとです」

はじめまして 父のたたおです

「第一」、余田甚之郷村屋書店刊行

もしごまかせんがよろしくお願ひします

「へこむるひへじあらそよぐか、」

ナノルーブルの運営会社は、日本では珍しい「株式会社」です。

優しそうな親父さんだつたな。

数分後、かがみとつかさも帰ってきたので夕食タイムが始まる。

「ただおもつか」

うん、超多重音声。

まあそんなことは気にせず夕食は始まつた。

おばさんの料理はなかなか上手くて箸がよく進む。

倉場君 お味はどー?」

すごく美味しいです。やっぱり自分で作るのは違いますね！」

しかしあばちゃんの料理はそこいらのレストランで出て来る料理よりも

上手いかもしれないな。

かがみ達もこんな料理が毎日食えるなんて幸せ者じゃないか。

「いやー、今日は世話をなつたな

それにしても格一家は仲がいいな。

聞けば長女のこのりちゃんは既に働いていると言ひへ。

家族で一緒にいるのはいいことだよな。

オレには、できなかつたことだから……。

「つー

「? かいと君、どうしたの?」

「……いや、少し気分が悪いだけだと思つんだナビ」

「そうね、顔色悪いわよ」

「……。すいません、お茶貰えますか?」

「ちょっと待つてね、はいよ」

「どうも」

オレは鞄から錠剤を一つ取り出し、口に放りお茶で流し込む。

「今何?」

「……ただの風邪薬だよ」

その後も楽しい夕食が続いたのだった。

「いいのよ、また来てね」

「うん、いつでも来ていいよ」

「おう、そん時は今日の礼も兼ねてな。じゃな」

「バイバイ」

手を振るかがみ達にオレも手を振り返し、自転車を走らせる。

大人数の食事、いいもんだな。

お宅訪問・柊家 後編（後書き）

それで、次回のらき すたは？

あやのです。

この前、高良ちゃんが一人だけ都内で暮らしてるのが寂しいって言つてたの。住む場所なんて関係ないのにね。

次回、

「お宅訪問・高良家」

柳家金語郎・高良隊（福井県）

なんか1Jの回は翻しづけ分かんないです

お世話訪問・高良家

「これはまたスゴイ家だな……」

今日はみゆきの家を訪問する」とになつていて。

のだが、オレは呆気にとられたままインター ホンを押す」ともままならない。

圧巻も圧巻。

豪邸と呼んでいいんじゃないかといつほどの家。

庭は広いし、家自体もでかい。

ウチのアパートとは大違いだな……。

とはいって、家の前でうわうわしているのは変質者と間違われる可能性大なので意を決してインター ホンに手を伸ばす。

「先輩……？」

「？ その声は、岩崎か

「はい……」

岩崎は向かいの家の門から顔をのぞせていた。

「みゆきさんの家に何か？」

「んー、なんだろ。家庭訪問的な？」

「はあ……？」

ま、普通は意味分かんないよなー。

「それで、岩崎はみゆきの家に何か用か？」

「はい。分からぬといふところを聞こうと思つて……」

「なるほど。じゃあ、一緒にいるか

「はい……」

岩崎がいることで大分気も楽になつた。

チャイムが鳴ると、少しして玄関が開いた。

「かいとさんもみなみもいらっしゃい」

……！

みゆきが他人を呼びすてにするだとおー？

「どうかされました？」

「あ、いや、その、名前……。」

「……？」

「こほん、あー、そのみゆきが岩崎を呼びすてにしてた件で驚いただけだ」

「ああ。」Jの子とはもう少しこ頃からの付き合いですから

「はい……」

「や、そうなのか」

まあ、確かにな。

みゆきから言わせてみたら岩崎は妹みたいなモノなんだろうな。岩崎にしてもみゆきは姉さんみたいなモノなんだる。

妹か……。

エクッ

「はつ……！」

「？　どうかされましたか？」

「……いや、なんでもない」

少し衝撃の走る頭を押さえながら近くの壁を支えに起きあがる。

「ふらふらですよ？　本当に大丈夫ですか……？」

「たまに、Jうして体調が崩れることがあるんだ。気にするな」

みゆきもみなみも少し心配そうな顔をしていたがオレが念押しに「大丈夫」と言つて安心したらしい。

みゆきはオレたちを自分の部屋に通した。

「お茶を淹れてきますので少し待つていてください」

「おひ」

「ありがとうございます」

みゆきは部屋から出て行き、みなみはテキストを開き、勉強を始める。

「あの、先輩?」

「ん、どうした?」

「少し、分からないとこらがあって」

「ん? どれだ」

「コレ、です」

みなみはテキストをぱらりし、オレに見やすいようにオレの正面に置いていた。

さて、

S U G A K U

SUNAKUだと白い死神のパイロットになってしまった。
なんて少し前のネタは置いておいてだ。

このオレ、倉場かいとは数学が壊滅的にダメなのだ。

毎回、赤点か赤点すれすれの点数を取り、補修の常連。

まあ、この間の実力テストで補修を受けなかつたのはヤマが当たつたのと勉強会をしたからだ。

「……すまん。オレは力になれない」

「？」

「分からないうこと」がみゆきに聞いてくれ

「はあ……？」

岩崎は訳が分からぬ、といふような顔をしたがどうやらオレは力になれないようだ。

「お茶をお持ちしました」

数分後、みゆきは紅茶を持って戻つてきた。

「みゆきさん、ここが分からなくて……」

「えつと、そこはですね……」

岩崎はみゆきに早速分からぬといふを質問し始めた。

本当に姉妹みたいだな……。

姉妹、

妹

「がつ！」

「「？」」「

「ぐう……うう……」

「！？　かいとさん！？」

「！　私、救急車呼んできます！」

「ぐつ！　い、いい！　呼ぶ、なつ！　！」

「え？」

「でも……」

「いいからっ！」

オレは肩で息をしながら近くにあつた椅子に腰掛ける。

「すまん、みゆき……。冷水、持つてくれ……」

「あ、はい！」

みゆきは大急ぎで部屋を出て行く。

「岩崎……。鞄から、タオルと錠剤……取つてくれ」

「はい……！」

岩崎はオレの鞄からタオルと錠剤を取るとオレに渡した。
オレは冷水で薬を流し込み、異常なほどに吹き出た汗をタオルで拭
き取った。

「はあ……」

「大丈夫、ですか？」

「ああ……だいぶ落ち着いたよ」

「無理、してませんよね……？」

「ただの、風邪だ……岩崎」

みゆきはオレの顔を心配そうに見つめていた。

「また体調が悪くなるようつでしたら何か言つてくださいね？」

「ああ……スマン……」

オレは、時が来たら「」の事を話さねばならないのだろうか……。

『あの事件』を……。

「あら~、どうしたの?」

「あ、お母さん」

ふと扉の方を見ると一人の女性が立っていた。

「私のお母さんです。お母さん、お友達の倉場かいとさんです」

「…………どつも」

「うふふ。私は高良ゆかりです~。よろしくね」

「よろしくお願ひします」

ゆかりさんは軽く挨拶すると1階に戻つていった。

大分落ち着いてきたオレはゆっくりと立ち上がつた。

「悪いな、みゆき。今日は帰らせて貰つよ。また機会があれば来るよ」

「はい、お待ちしておつます」

「岩崎も、またな」

「…………はい、また」

オレは……こつまでオレのままにられるだろつか……。

そして、また時は流れ始めるのだ……。

お伊訪問・高良家（後書き）

オレの脳裏に流れる映像。

忘れない過去。

捨てられない過去。

でも、今は話す気になれない……。

次回、

「桜が散り始めて」

桜が散り始めて

こなた side

4月も終わりに近づいて変わったことが一つ。

「かがみ～ん、どうだつた?」

「ダメ。また誘えなかつた」

「そつか……」

かいと君の態度があかしいこと。

当初の頃のような冷たさはないが何かにつけて私達を避けるのだ。

「どうしたんだろね……」

「何が原因かしら……?」

私が考える限りでは心当たりはない。

「それにしても、かいと君が一人いなideだけでだいぶ違うね……」

「そうだねえ」

まったくもつてつかさの言つとおりだ。

彼といたのは一月もなかつたのに。

「何か、あつたのでしょうか?」

「ん~、いつも通りだつたと思うんだけどなあ~」

私は机に突つ伏して頭を押される。

私の記憶ではかいと君が避け始めた三日前まではいつも通りの日常を送っていたはず。

私はそんなことを考えながらロッケを齧つた。

かいと side

こなた達を避け始めて三日が経つた。

自分でも感じが悪いとは思つ。

でも、仕方のないことなんだ。

そうじないと、こいつか辛くなる。

アイツ等にも重荷を背負わせるこことなつてしまつから。

だから、このままがいい。

諦めきれない気持ちを抱いたまま、今日の授業は終わらうとしていた。
のだが。

「私から逃げられると思つてか！？」

「！？」

オレの前に立ちふさがるこなた、つかさ、みゆきの三人。

「ふつふつふ」。いつも最後の授業はさぼつてたけど今日に限つて出席したのは間違いだつたね
しまつた！

ていうか、流石に見かねた天原先生に授業に出でつて言われただけ
だけど！

「ねえ、かいと君。何で私達のことを避けてるの？」

つかさは心配そうにオレの顔をのぞき込んでくる

「な、何でもない……」

「かいとさん。何かあるんじゃないですか？ 先日の件もそうですが」

みゆきはまっすぐにオレを見ている。

「……わかった。そこまで言つなら、納得のいくまで話をしてやる」

オレたちは隣のクラスであるかがみを待ち、5人で屋上へ向かった。

放課後の屋上は流石に人気はなく、オレ達5人しかいない。

時折吹く風は制服を揺らし、ちょっとした肌寒ささえ感じさせる。

そんな中、向かい合うオレとこなた、かがみ、つかさ、みゆき。

ほんの少しの静寂の中、オレは唐突に口を開いた。

「まず、最初に言つておく。オレにはもう関わらないでくれ」「これだけで言うことを聞いてくれるような聞き分けの言いやつ等じやないことは十分理解している。

「分かつてるのは思うけど、それだけじゃ私達は納得しないよ？」

「……だらうな」

そう言つてオレは肩をすくめる。

「かいと君。教えてほしいの、そこまでして私達を避ける理由が」
かがみは真剣な顔でオレを見ていた。

つぐづぐ、自分の性格を呪うよ。

「コイツらの頼みを断ることができないなんてね。

「怖いんだ……」

かがみ side

怖い？

「何が、怖いの？」

つかさはおそるおそるかいと君に聞いていた。

「失うのが怖いんだ。大切な人を失うのが……」

「大切な……人……」

かいと君は私達のことをそんなにも、大事にしてくれていたんだ……。

私は胸が熱くなるのを感じながらまた言葉を連ねる。

「でも、どうして？」

「それだけでは、とても避ける理由には行き届いていませんが……みゆきも何時になく納得のいかない、という表情をしていた。

かいと君は苦い表情を浮かべると少し俯いた。

「それは……。オレの過去から話さなきやいけなくなる……」

「過去……？」

「どんなことがあったの……？」

こなたは不安そうな顔でかいと君を見ていた。

「知られたくない……。オレの過去を知つてしまつたら、きっとみんなはオレのことを軽蔑するから……」

「……なんで？」

「……」

そこまでして知られたくないかいと君の過去って、何？

「私は聞かない。かいと君が話したいと思つまで聞かないよ？」

こなたはそんなことを言つていた。

「誰にだつて知られたくないことの一つか二つあるでしょ？ それを強要して聞き出そうなんて私は間違つてゐると思つ」

「こなた……」

「私もそう思います。無理強いは良くないですから」

「そう……だよね。無理をせちやダメだよね」

みんな、そう思うんだ。

かいと君を助けたい、でも彼がどうしても話したくないのなら無理に聞かない。

そうよね……。

「私も、聞かないわ。いつかかいと君が話したいと思つまで待つ

かいと君は少し躊躇つた顔をするとまた顔を上げて言つた。

「ありがと……」

彼は、泣いていた。

かいと side

ホント、自分が嫌になる。

コイツらにこんなにも信頼されてくるのに話すこともできないなんて。

「かいと君、私達が軽蔑するとか“そんな悲しいこと言わないでよ”。私達はいつもかいと君の味方のつもりだからさ

「そうそう。だからそんな不安がらなくていいんだよ
「かいと君は大事なお友達だもん。離れたりしないよ?
「ええ。ずっと傍にいます」

「そうか……。

オレの望んだモノはきっとオレの手の中にあったんだ。

なのにそれを見落として、

突き放して、

また、失おうとして……。

本当にバカだ……。

でも、今は違う。

オレの目の前にある。

だから……

「友達になつてくれるか? もう一度……」

少女達は、見合つて笑い、そして言った。

「おくおく、どんと来い!」

「バーカ、縁切った覚えはないわよ」

「よろしくね、かいと君」

「また、これからも仲良くしてほしいわね」

そうだ……。

「ハイシ、
モヒンは、

オレにとつて

救いの

天使だつたんだ……。

オレの物語はまだ終わりじゃない。

だって、これは

まだ、

不幸の物語の、序章だったのだから……。

桜が散り始めて（後書き）

さて、次回のらき すたは？

4月も残り一週間。

来たる4／26って一体何の日だつけ……？

次回、『4／26　かいと怒濤の誕生日編』

「ちょっとした余興」

ちょっとした余興

4月もあと僅か。

すっかり桜も散り、校庭の桜の木々は少しだけ寂しげに見える。

オレたちが縁を切つてしまつという事件は未遂で終わりこうしてまた穏やかな日常が戻ってきた。

いつも通りの長つたらしい授業も終わり、一つ伸びをして欠伸を放つ。

「はあ。流石進学校だなつて思つときがあるぜ……」

「そうだよ。私なんて黒井先生にゲンコツされた……

いや、こなた。それはお前が悪い。

つーか今時寝てる生徒を殴つて起こす教師はいるのだろ?つか?

そんなことを思いつつ、教科書やらを鞄に詰める。

「でも難しい授業だと先生が外国語話してるように聞こえない?」

「あー、それすつごい分かるよ!」

こなたとつかさはがつしりと手を握り合つ。

なんだこのノリ。

「そういうみゆきはいつも授業に集中してゐよな。なんかコツとあんのか?」

「いいえ。私は寝ないと駄目な方なので11：00には寝てしまいます。ちなみに2年生までは10：00には寝ていましたダメだ!

これは人生損しているようで真似できません!!

かがみとも合流し、学校を出る。

「もう4月も終わっちゃうな

「そうだね。なんだかんだで色々あつたしねえ」

「そうそう。こんなバタバタした一月なんて初めてよ……」

「そうだね。いっぱいあつたね」

「ええ。少し乐しかったかもせんね」

すっかり爺臭いムードになってしまった。

「そういうば、かいと君て誕生日いつ?」

そんな空氣を打ち破るようにこなたはオレに尋ねてきた。

「誕生日?」

誕生日……

「あ……！」

絶叫。

「ちょ！ 何！？」

「誕生日…… 明後日だ……」

「忘れてたのかい！？」

そう。かがみのツツコミ通り、オレは自分の誕生日を忘れてしまっていたのだ。

なにせ、この一ヶ月は色々なことがありすぎたからなあ……。

つまり、明後日でオレは18になるということだ。

「そりなんだよ。じゃあかいと君のお祝いしないとねー！」

つかさはにっこりと笑った。

「そうね……。せつかくだし、ミニパーティーでも開いてパーティとやりますよ？」

かがみも乗り気なようでオレに田配せをする。

「そう、だな……。たまにはいいかもな！」

むしろパーティなんて大感激だ。

「ですが……準備期間も短いですし、急がないといけませんね」

「あー、やうだネ……」

「ははは。そん時はオレも手伝ひよ」

「「「「意味ない（よ）（です）……」「」「」」

「なた達はともかくつかさやみゆきにまで怒られてしまった。

プライドだろうか？

第一、かがみは料理得意じゃないの?……。

「失礼なこと考えてない?」

「イエ、ナニモ」

何故オレの周囲には勘の良いやツばかりいるのだろうか。

まあ、そんなこんなでパーティの日程やら人集めやらはこなた達が段取りしておいてくれるというのでオレにはなんらすることはない。ここまでやつて貰つんだ。

アイツらの時もパーツとしてやらないとな。

まあオレがアイツらの誕生日を知らないことは後に知った事実であるが。

オレは明後日に行われる『かいと君聖誕祭（仮）』（こなた命名）に胸を躍らせつつ、今田の夕飯は何にしようかななどと思い、傍にあつた適当な安いネギを買い物かごに入れるのであつた。（長いぞ、この一文）

「ただいまー」

何故だかこなた達と出合つてからいつ間にかことが増えた。

別に言つたからといって返事がくるわけではないが、つーか返つてきたら怖い。

適当に鞄と上着を放り、冷蔵庫を開けていくつかの食材を見回す。

「さて、今日は何にするかな……」

「UJの食材だとカレーとかできそうじゃない?」

「そりだな、カレー粉もある?……」

こんな展開は前にもあつたな……。

オレの隣には高校生と言つには無理のありすぎる身長を持つ友人がいた。

「またお前か……」

「んふふ~。よく分かつたね」

「前にもあつたからな……」

ていうかこんな事するヤツはお前が強盗ぐらいだろ。
なんてツッコミはどうでも良い。

コイツには何言つたって無駄だからな。
そんなの分かりきつてることだ……。

「こなた~、どうしたの?」

「だ、ダメだよう、お姉ちゃん!」

玄関の方からもう2人の声が聞こえてくる。

どうやら姉妹らしく、片一方はこなたと同じく常識の一部が欠如してこるヤツらしい。

どうして分かるかつて?

人の家に勝手に上がるヤツに常識があるとは思えねえ!!

「おいおい、何処の誰か知らんが人の家に勝手に上がるんじやねえ」

「んう? どちら様かな?」

「あ~、ゆい姉さん。紹介するね、友達の倉場かいと君。かいと君、
従姉妹のゆい姉さん。婦警さんなんだよ」

「ちゃーす! こなたの従姉妹の成美ゆいでーす!」

「おい、警察官!」

警察が常識持つてないでどうする!..

「人の家に勝手に上がる警察ってどんな人だよ……」

「大丈夫だよ、私が許可したから」

「勝手にするな!!」

「あ……。

溜息をつくオレの視界の端に入つたのはこれまたこなたと同じく高校生とは言い難い身長を持つた少女。

「小早川も一緒に」

「はい……。すいません、先輩」

「もういいよ。この人もこなたと同種の人間みたいだからな……」

「お姉ちゃん、いい人なんですけどたまにこういう事になっちゃつて」

お姉ちゃん?

こなたの事か?

「もう慣れてるから安心しin」

「でも、先輩。お姉ちゃんと会つのは初めてですよね?」

「?」

何だ?

小早川の言つてることが分からぬ。

そんな状況を見かねたのか、こなたはオレに耳打ちした。

(ゆい姉さん、ゆーちゃんのお姉さんなんだよ)

(姉妹? でも名字違うし……)

(既婚者だからね。当たり前でしょ?)

なるほど。

小早川から見れば成美さんが姉でこなたが従姉つてことか。
ややこしいな。

「というわけで、かいと君。今日は夜ご飯御馳走になるからね」

「あー!？」

「もーお腹ペコペコでさあ」

「自分の家で食つてこいよ!」

「そんな連れないと言わないでさあ」

「やうだみ、少年。」

「だあ！ 」あなたも成美さんもいい加減にしろっ！」

抱きついてくる。「なたにはゲンハツを、成美ちゃんにゼットハポンをお見せす。

גַּעֲמָנִים

「なんで私だけ……」

一初対面の人を殴れるか

「アーッ、ハハでしょお？」

懲りずにオレの服の端を掘んでくる」なた。

まつたく

「すく作るから、」
「分かっただよ。座ってゆくにして、

「お世話になるよ、少年。」

「えりと……おつかいじやこあす

小早川

こなたや成美ちゃんのよつに、**國々**しきない。

本当に成美さんの妹なのかと疑いたくなるような性格に感激しつつ、
キツチンに立ち準備を進める。

じ、もう料理を進めていいかなたもギッセンに来た。

「どうした？」

「ん~、少し手伝おうかな~」とか思つて

「なほ温めていた鶴の刃で茹いた野菜や肉を入れて炒め合せだ。

「怒ってる？」

「別に。お前の性格知つてりやどうしようもないって分かるわ」

「そうなのか？」

「明後日の誕生日会の会場の下見、かな？」

「会場つてウチなのか……」

「まーね。他の家は何かと都合取れなくて、
てことはアイツらもウチに来るんだよな……。
たまにはちゃんと掃除しないとなあ。

そんな話をしながらカレーは完成し、4人分をリビングに運ぶ。

「ほーい、お待たせ」

「いよっ！ 待ってました！」

器をそれぞれの前に並べてオレも座る。

「じゃ、いただきます」

オレに習い、3人も手を合わせる。

「「「 いただきます」」

みんなで食べたカレーはすゞく美味かった。

ちよつとした余興（後書き）

それで、次回の「りき すたは？」

もつ4円も終わつちまつただよなあ。

でも、4円の最後にいい思い出ができたつで嬉しいよ。

次回、

「秘密の出金」と「現金」

秘密の出金」と引寄せ

「～～～」
友人達主催の誕生会を明日に控え、テンションを上げるなという方が無理難題である。

自然とオレの足も軽やかになり、鼻歌も混じる。

まあそんなことに注意を割いていて前方の注意がおろそかになってしまっていた。

「きやつ！」

「うわっと！」

案の定といつかなんといつかオレはその角を曲がってきた少女とぶつかる形になってしまった。

少女は重そうな本やら書類やらを抱えてきてそんなものを持ちながらオレとぶつかった訳で後に体勢を崩してしまった。

「危ねえ！」

オレは急いで少女を抱えて起こした。

「悪い。前見てなかつたから」

「いえ、私の方こそ前見てなくて……」

「前見るも何もあんなの抱えてちゃ見えねえだろ」

見たところ日本史の資料だ。

大方、次の授業の資料でも取つてきていただらうな。

「お詫びに運ぶよ。教室は？」

「えつと、1・Dです」

「そうか、ほら貸せ」

オレはいくつかの資料を持つとそれらを抱えて1・Dを田指した。

「あの、いいんですか？ 大半を持って貰つて……」

「女子にこの量はキツイだろ。ぶつかつたオレも悪いんだから気に

Digitized by Google

「めりがじいじやうこやか」

なかなか今時いない礼儀正しいヤツだな。

「あなたにも見習ってほしよ……。

? ? ?

はあ。

誰か知らないけど、ふつが「て悪い」としゃせたなあ。

おまけに資料まで運んで貰って、失礼な後輩とか思われてないかな

■ ■ ■ ■ ■

つ
て
！

その資料の中に資料室で隠れて読んでたマンガが混ざってる！

卷之三

だからってクラスで取るのもばれちゃうし……。

和とすれはいのおり

かいと side

۷

少女は頭を抱えてあれこれ悩んでいる風に見える。

時折、オレの方をチラチラと見てまた同じ事をくり返している。
何なんだ……？

「そ、そういうわけで、先輩は最近面白かったとかありました！？」

- ?

どうしていきなり?

もしかして沈黙といふかプレッシャーで耐えられなくなつたのか？

しまつたなあ……。

上級生として氣を配るべがだつたな……。

まあこゝは空氣を和らげるために話に乗る方がいいかもな。
「面白いつていうか、嬉しいことならあるよ」

「嬉しいこと、ですか？」

「明日オレの誕生日でさ、友達がパーティー開いてくれるんだ。だからそれが嬉しいでさ」

「…………いですね、そういうの」

「まーな。…………つてアレ？ なんか漫画本挟まつてる

「！？」

何故こゝに挟まつてるんだ？

資料室にあるわけないし……。

つーか、これ……

「あの…………それ、私の…………」

「これ…………、お前のなのか…………？」

「う、え、ま、まあ…………その…………はい」

「これ…………最新刊…………」

そう、最近は金穴気味で買えなかつた最新刊だ。

月の暮れは援助金も少なくてオレとしては大分生活も苦しく、欲しいものが買えず我慢していた。

「お前もこれ読んでるのか？」

「…………はい。ていうかあんまり大っぴらに…………」

「つて、そだな…………。先生に見つかるとめんじくをそりだ」

「え？ いや、あの…………」

無事、資料を届け終わつた。

「じゃ、漫画見つからないよつてじろよ」

「あの、先輩。これ、差し上げますよ」

「……いいのか！？」

「はい。手伝ってくれたお礼です。それに……」

「それに？」

「何でもないです！ 私からの誕生日プレゼントって事で！ 明日、誕生日なんですよね！？」

「あ、ああ。サンキュー。えっと……」

「若瀬いずみ、です」

「そうか、オレは3-Bの倉場かいとだ。ありがとな、若瀬！」
そろそろ授業が始まる時間だな。

次は黒井先生の授業だし、遅れないようにしないとな。

そう思い、オレは若瀬に手を振つて教室へと走つた。

いずみ side

なんだか嵐のような人だったな。

初対面の私にあんなに優しくしてくれて。

私のことを『オタク』って軽蔑しないで。

すごい良い人だな……。

「いーすみ、どうしたの？」

「さつきの先輩、どこの誰？」

「な、そんなんじゃないわよ！ 偶然通りかかって助けてくれただけなんだから！」

「でもさつき何かの本渡してたじやーん？」

「だーかーら！ そんなんじゃ ないってばーー！」

確か、倉場さんって言つてたつけ。

機会があったら、話してみようかな……。

そんな春の日の出来事

秘密の出来こと手紙（後書き）

さて、次回の ragazzo すたは？

1年の教室から3年の教室つて結構遠いんだな……。
おかげで黒井先生のゲンコツをくらつたぜ……。

さて、今日もまた昼飯昼飯つと……。

次回、

「誕生日会……のちょっと前」

誕生日会ー……のちゅうと前

「かいとくへん、お毎食べよ~」

「あいよ」

いつも通り、こなたはオレの席に椅子を寄せて弁当をひろげる。

かがみ、つかさ、みゆきも揃いつやく昼飯タイム開始だ。

「いやー、昨日は久しぶりにネットゲ以外で夜更かしあやつたよ」

「やういえば、昨日の夜は飯食つてすぐ帰つたよな。何してたんだ

？」

「何言つてるの~？ 誕生パーティの準備に決まつてるトシヨ~？」

「あー、そうだつたな」

そういえばそうだ。

あんなに楽しみだったのになんで忘れてたんだらう~。

ズキン

「イツはなんだかんだけで料理が上手いしな。

今からでも楽しみだ。

「私もケーキ作り頑張つてるんだ~」

「お、つかさがケーキ作るのか。楽しみだな」

つかさはそう言つてあははと笑つた。

つかさも料理は上手いな。今からでもよだれが垂れそうだ。

「私も気に入つて貰えるかは分かりませんが腕によりをかけました

「そんな謙遜するなよ。みゆきだつてけつこうできるじゃないか」

みゆきはなんでもできるからな。料理も得意だわ。楽しみだ。

「まあまあ、私もできないなりにつかさを手伝つたりとかしてるわ

よ

……。

「何よ、その皿は」

「アハハ、樂シミダナー」

「棒読み！？」

かがみには悪いがいまいち期待できない。

漫画の中の主人公のように黒こげの手料理を笑つて食べるなんてし
たくないものだ。

まあ、流石のかがみもそこまではないだろ？が。

「でも、ホントにオレも手伝わなくていいのか？」

「何言つてるのよ。かいと君の誕生日なんだから。私達がするわよ
「そつそつ。かいと君が今まで見たこともないようなパーティを開
いてしんぜよう」

「私も頑張るから楽しみにしててね！」

「（）期待に添えるかどうかは分かりませんが楽しみにしていてくだ
さいね」

まったく、コイツ等は……。

オレ一人の誕生日に張り切りすぎじゃないか？

でも、こうされるのも悪くないよな……。

こなた side

ん。

やつぱり同年の女の子達にこんな事して貰えるなんてかいと君はつ
くづく罪作りな男の子だねえ。

まあ、格好いいっていうのは認めるけどね。

それにもこの一月で見させて貰つたけど結構なフラグメイカーだしね。

それと同じくフラグクラッシュナーでもあるナビ。

でも、私が今まで男の子にこんなことしたことがあったたつけなあ……。

やつぱり、かいと君に何かあるのかなあ。

私達を惹きつける“何か”が。

かいと君と話してるとすげい心が温かいし。

ぽかぽかするんだよね。分かります、綾さん。

私、かいと君のこと好きなのかなあ……。

かがみ side

はあ。

かいと君、私達に馴染んでくれたのは嬉しいけど、やつぱり少しは気をつけて欲しいものだわ……。

料理下手なんて女の子にとっては死活問題なんだから……。

もう少しオブリークトーに包むつことを知らないのかしら?

まあ、見てたらかいと君って女の子の扱い上手くないみたいだしね

……。

仕方ないのかも。

でも、おかしいな。

料理下手なんてこなたに何度も言われてるけどじゃなー……。

それって、かいと君が特別な人、ってことよね? 私にとつて……。

もしかして、私、かこと君の」と……。

つかさ side

えへへ……。

かこと君、私の料理の」と楽しみて言つてくれたな。

なんだかかいと君に言われる「す」「がんばれる」がするな……。

よーしー！

かこと君にもつと頬張るよつともつと頑張りやねー！

でも、かこと君て本当に不思議な人だな……。

かこと君とこるとす「」心強いつていうか……。

でも、それはお姉ちゃんところとはまた違ひんだよねえ……。

なんなんだい？……？

みゆき side

かことちゃんは本当に優しい方ですね。

こんな私にも変わりず接していただいていますし。

至らぬ私でお恥ずかしいのですが、できるだけかいとちゃんに喜んでいただけるよう頑張らないといけないです。

かいとさんにとって私はどのように見えているのでしょうか……？

私はかいとさんは特別な方だと思いますね。
ただ単に能力が優れているといつ意味ではなく、求心力、でじょう
か？

かいとさんと話しているとき、とても心が舞い上がっているような
気分になるのです。

この気持ちちは一体何なのでしょうか……？

かいと side

「？」

どうしたんだ？

みんなオレを見てずっと押し黙っている。

「な、なあ、どうしたんだ？」

「え？ あー、なんでもない」

「気にしないで！」

「う、うん！ 何も考えてないよ？」

「な、何でもありません！」

いや、どう考へても何かあるだろ。
みんな一斉に顔を紅潮させている。
なんなんだ、一体……？

そんなよく分からぬ昼休みを終えて下校時間。

明日は休み兼誕生パーティーだ。

オレは遠足前の小学生のような気持ちになり、柄にもなくスキップなんてしてみる。

「ヒヨリ、アソコにヘンシシシャがいマス！」

「ダメだよ、パティちゃん……。先輩に向かつて変質者なんて言つたらダメッス」

見られてしまつたか……。

腐女子Aこと田村ひよりと腐女子Bことパトリシア・マーティンだ。

「よお、今日はお前ら部活無いのか？」

「いえ、今日はアキバ集合ッス」

「ワタシタチはスコジョクれてしまつたデス」

「そうか、あんまり遊んでないで少しほ勉強もしろよ?」

まあ人のこと言えた義理じやないが。

「あー、そういえば聞きましたよ。明日先輩の誕生日らしいッスね」

「あー、まあな」

「というわけで私とパティちゃんでプレゼントを買つたッス

「ホントウならパーティにもデたかつたのデスが、ヨテイがカサなつてしまつたのデス」

「そうち……、これだけでも嬉しいよ」

「いえいえ。これぐらいお安いご用ッス

「デハ、カイト。ハッピーバースディね!」

「おう、サンキュー!」

やつぱり、田村とパトリシアは行ってしまった。

「さて、アイツ等は何をくれたのかな」と……
渡された紙袋を漁る。

どれどれ……

「『本当にあつた××なB』『田選』……」

オレの本を持つ手がぶるぶると震える。

「「」なんのいるか
…………」

オレの叫びが夕焼けの空に響き渡った。

くちなみにその後>

「やつほー、お待たせ。かいと君
「あら? 何持ってるの?」「
「げえ! いや、これは……」「
「『本当にあつた××なB』『田選』……?」「
「何でしちゃうか……?」「

「なたとかがみはオレを見て軽蔑のまなざしを送る。

「うわあ……。流石にそれは笑えないよ……」

「かいと君……アンタ、そんな趣味だったのね……」

「ち、違うー 断じて！ー」

『嘘だつ……』

「こや、どういひよー?』

そんな離見 の女の子のよつて云ばれてー

ちなみに誤解を解くのに30分を費しました。

誕生日会！…………のちよつと前（後書き）

それで、次回のらき　すたは？

な、なんなんだいきなり！？

いきなり家に来たかと思えば何をして……！？

次回、
「誕生日会！　主役放棄」

誕生会ー 主役放棄

「はあ……。何すつかなあ……」「

とある市街地。

オレはそこでアテもなく歩き回っている。

誕生会当日。

なぜオレがこの日はこんな街中を徘徊しているのには意味がある。

てなわけで回想シーン

いつも通りの朝のハズだった。

「つ〜〜！ いい朝だな」「

天気も良く、日差しも気持ちがいい。

あとは掃除をしてこなた達を待つだけ

……のハズだつたんだが。

勢いよく家のドアが開き、事件はやつてくる。

「この家は我々が占拠したあ ！！」

「何事だ ！？」

事件はいきなりドアを開け、オレを外に放り投げた。
そしてドアの鍵を閉めた。

「ちょ！ せめて着替えさせてください！」

流石に寝間着は外を出歩ける格好とは呼べない。

何とか家に入れて貰つて普段着に着替える。

「で？ 何でまたオレを追い出したんだ？」

「いやー、飾り付けするからかいと君には知らない方がサプライズ感あるデショ？」

「それでオレは追い出されると？」

「大丈夫よ。そう時間かかるモノでもないし、しばらく街の方でも回つべきたら？」

「……」

回想シーン終了

てなわけで色々と口車に乗せられて家を追い出された次第である。

家主のオレの意志は何処に？

なんて思つたが時すでに遅し。

とうあえずちらほら開いている店を回つてみるが特になにもない。それにしても後何分かかるんだ……。

そんな感じで暇つぶしのために街中を徘徊しているわけだ。

そんなオレの視界に映るのは……アレは、峰岸か？

かがみのクラスメイトの峰岸だ。

それに、なんか男と一緒にだな。

……手を繋がれていらっしゃる。

これは……

「お？ 確か倉場だつけ。何してんだ？」

「うお！？ 日下部か……」

同じくかがみのクラスメイト、日下部だ。

「お、おーーー、峰岸が……」

「お？　ああ、デート中だっけ」

「で、デート？」

「そ。あやのはウチの兄貴と付き合ってんだ」

マジか。

まあ確かに峰岸はあの性格だしモテるよな。

みゆきも同じだがあつちは驚異のフラグクラッシュジャーだからな……。

「それで？　日下部はずっとあの2人を追いかけ回してると」

「別にそんなんじゃねーよ。たまたま通つただけだし」

「ヒマなのか……」

「じゃ、しばらぐ2人で暇つぶしでもすつか？」

「お、いーんじゃねえか？　ゲーセンでも行くか！」

とりあえず、この暇を潰すために遊ぶこととしたのだった。

「それにしても日下部は走るの速いな」

「まーな。これでも陸上部だし」

なんか途中で競争をしてしまったオレ達。
流石陸上部というかなかなかいい走りだったな。
オレもつい熱くなっちゃったぜ……。

「それにしても倉場もこんな朝っぱらから遊ぶなんてヒマ人だなー

「お前に言われたくない。しかも好きで遊んでるわけじゃねえ」

「なんだそれ？」

「いや、少し家の方に強盗が押し入ったというか……圧力に屈した
といふか……」

「？」

日下部は訳が分からない、といった顔をしている。

まあ、だらうな。

遊び疲れて、そこいら辺のベンチに腰掛ける。

「よつと、飲み物買つてきてやるよ。何がいい?」

「じゃあオレンジジュースで!」

「はいはい」

田下部をそこで待たせて自販機を捲す。

「こり辺にはないな……。

数分後

飲み物買うだけで随分と時間がかかつちまつたな……。
見つけたと思つたら行列だつたり、修理中だつたり、随分と運悪く
ないか?

田下部、怒つてねえかなあ……。

「田下部、悪い。待たせて……つて寝てる」
ベンチを我が物顔で占拠してやがる。
しじうがないな……しばらく寝かせて……

と思つていたら携帯のホールが鳴る。

「はい?」

『おへ、かいと君? 準備できたから帰つてきていこよ』

おー、バッドタイミング。

びうじょつ……。

田下部を置いて帰るなんてまず無理だよな……。

「仕方ないな……。オレの家に連れ行くか

田下部をおぶり、ゲーセンを出る。

「あ、倉場君」

「あ、峰岸」

「ん？ あやのの友達か？」

「うん。隣のクラスの人なの」

「ども」

あ、確かにこの人日下部の兄貴だつて言ってたつけ。

「デート中にこんな事するのは少し気が引けるけどしようがないな。」

「あのー、申し訳ないですがこっちの日下部さんを預かっていただ

けると大変嬉しいんですけど……」

「あれ？ みさちゃん」

「みさお……何やってるんだ」

日下部の兄貴はオレに変わり、日下部をおぶった。

「ちよつど家に帰るところだつたんだ。ありがとうね」

「いえ、オレの方こそ。急ぎの用があつたもので」

「そう。ありがとうね、倉場君」

「ああ。じゃあ、急いでるんで」

オレは3人と別れ、家を目指し走つた。

短い時間だつたけど、結構楽しかつたな。

誕生会ー 主役放棄（後書き）

そーて次回の「らきすたは？」

やつとパーティか。

今からでもワクワクしていくよ。

楽しみだ。

次回、

「誕生日会ーー！」

誕生日会！！

「かこと頬（やゑ）、誕生日おめでとう……。」「うーん、」

ドアを開けるとクラッカーやら大声やらが入り交じつてなんて言つてるのかよく分からぬお祝いの言葉を受けてオレの誕生パーティーは始まつた。

「5人でひとつそりバー・ティか。寂しいな」「もう、折角用意してあげたのに……」

「嘘だよ。嬉しいって」

い。実際高橋に自分の誕生日を祝おうとがんばり如

「かいと君、ジユースだよ」

卷之三

その間にかがみとみゆきは次々と料理を運んでくる。

どれも美味そうだ

オレは最近にあつたチキンに手を伸ばす。

「それねえ、かがみんが味付ナしたんだよ」

「そり聞くと美味く感じなくなるのは何でかなー」

「やがてこう意味だつた！」

「まあ、まあそりゃうね。でも、別にアンタのために作ったんじゃないん

だから！」

「いや、作れよ」

シンデレラ発動は面白いが今のセリフはどう考へても誕生日会に祝う

相手に言へ、言葉じゃない
とりあえず次はおにぎりに手を伸ばす。

「かいとさん、お味は如何ですか？」

「ん、なかなか塩がきいてて美味しいぞ？」

「良かったです」

なるほど。これはみゆきが作ったみたいだな。
やつぱり上手じゃないか。

食事も腹八分目に止め、メインのケーキが運ばれてくる。

「美味しくできてるといいんだけどなあ」

「どれどれ？」

ショートケーキだ。

お店で見るようなスゴイ感じの物でこれは味も期待できそうだな。
とりあえず、フォークで一口パクリ。

「こ、これは……」

「ど、どうかな？」

「美味いぞ！」

かなり美味しい！

食が進むぞ！

「流石は調理師志望だな」

「そんなことないよ～」

つかさは顔を赤らめて照れているが照れぬことはない。

これは十分店で出されても文句なしのレベルじゃないか？

こなた達もケーキを食べて「「「おお……」」と感心している。

「流石だね、つかさ」

「ええ。また腕が上がってるわね」

「スゴイですね、つかさん」

大絶賛だな。

軽くこれで稼げそうだ。

にしても、こなだけ食つてると喉が渴くな。

「スマン、こなたジュース取つてくれるか？」

「はいはい、どーぞ」

こなたはオレの「カツ」にジュースを注ぐ。
少しばかり甘い匂いのする液体を一気に飲み干す。

ふはあ……

……。

こなた side

あれ？

この缶……耐ハイだ！！

どうじょつ。家からジュースと間違つて持つて来ちやつたよ……。

あー、かいと君に怒られちゃうなー。

しじうがないよね、今回は私が完全に悪いし……。

「あはは～。こなた、これ美味しいな。もつと追加で

「……え？」

あれ？

なんか予想外の反応。

てこうか……顔、赤くない？

まさか、酔つて……ない？

かがみ達も流石にかいと君の異変に気付いたのかかいと君の顔をのぞき込んでいる。

「ちょっと、かいと君？ 顔赤いわよ？」

「どうしたのかなあ？」

「大丈夫ですか？」

「なはは、らいりょーぶだつて！」

大丈夫じゃない！

呂律回つてない！

つてかがみの視線がイタイ……。

「アンタ……まさか」

「な、何のことだかわっぱり……」

「アンタの持つてるソレ、お酒じゃないの？」

「そ、そのような事実は一切ゴザイマセン」

「……見せてみる」

かがみはゆっくりと私の方に迫つてくる。

ああ、かがみの背中から何か出でる！ オーラ的な物が……

「まーまー、よせよ。かがみ！」

酔つたかいと君がかがみを止めてくれた。
セーフ。

「かいと君は話をややこしくさせるから黙つてて」

「何で？ とりえず落ち着こつぜ～」

「だから、今はこなたをどうにかしないと……むつ」

「「「一?」」「」

かがみ side

え！？ 何！？

何か唇に柔らかい感触が！

て、 いか…… 私、 キスされてる…… ー？

かいと君の顔が田の前にっ！？

ああ、 でもこいつして近くで見るとすげー端正な顔してる…… って何
考えてるのよ！

かいと君の顔はゆつくりと離れて柔らかい感触も無くなっていた。

「どーだ、 これで少しばかり落着いただろ！」

かいと君はドヤ顔で腰に手を当て大笑いしていた。

「ん～？ かがみ、 どうした？ 顔が赤いぞ～」

「な、 な……」

「何するのよ、 この変態があーー！」

「げふつーー！」

気がつけば私はかいと君を殴り飛ばしていた。

誕生日会ー その後

「つまつー、頭痛い……」

気がつけば朝。

オレはベッドで目が覚めた。

「あれ？ オレいつの間に寝てたんだ……？」
確かに昨日はこなた達が誕生日会を開いてくれて、
上手い料理を堪能して……それから？

……ダメだ。

頭痛がひどくて思い出せない。

にしても、この頭痛も何なんだ？

とりあえず近くにあつた携帯に手を伸ばし、メールを確認する。

「？ かがみから？」

昨日の夜遅くにかがみからメールが来ていたようだ。
届いたのは23時。

とこうことはその時間までにパーティは終わったといつとか。
内容は……

『From かがみ

件名：なし

本文：殴ってゴメン……。

でもアンタにだつて非はあるんだから、おあいこだからね！
とにかくあの事は私達も気にしてないからもう忘れましょ？
じゃあね！

み

かが

……あの事?

何だ、結局のところ一体何があったんだ?

……」なたにでも聞いてみるか。

数回の『ホールド』なたは出た。

「よお、朝早くから悪いな

『いーよーよーよ、気にしないで』

「早速一つ聞きたいんだが、オレは昨日の夜、かがみに何かしたか
?」

『……あー。何でもないよ?』

「ちょっと待て、何だ、今の『あー』って

『かがみが忘れようつて言つてたんだから別に掘り返す事でもない
んじやない?』

「……そういうもんか?」

『そうこうもんだよ』

『そうか……悪いな

『つづん、いーよ。じゃあね』

「おひ。またな

よく分からなかつたがとりあえず電話を切る。
こなたもああ言つたことだし、もつれるか……。

オレはゆうべつと立ち上がり、頭痛に耐えながら結局昨日できなか

つた宿題を大急ぎで
片付けるのであつた。

大人数で過ごした幸せな誕生会の余韻に浸りながら……。

◀翌日 ▶

「よお、おはよう。かがみ」

「えー? あ、ああ、おはよう……」

「どうした?」

「何でもないわよ!」

かがみはいきなり拳を振り下ろしてきた。
危ない危ない。

「何を怒ってるんだ?」

「怒つてないわよ!」

「ホントか?」

この対応はどう考えても怒つているようにしか思えないが。

「かがみんは照れてるんだよ。察してあげなよ」

「うお、こなたか……」

いつの間にオレの背後に回り込んだのかこの小動物はニヤニヤと笑
いながらオレとかがみを見ていた。

「何に照れてるんだ?」

「それは自分で考えてあげなよ

「???」

それだけ言つとこなたはかがみどびこかへ行つてしまつた。

かがみは一体、何に照れてるんだ……？

まあ、その事件もすっかり忘れて翌日にはまた仲直りしてたけどね
！！

幸せな夢には満足したか？

……いや、まだ満足できていないようだな。

いいか？ どれだけお前が過去から逃げよつぱりすら「」ともでき
ないんだ。

幸せの分だけ、報いは受けことになるのだから……。

そして、お前はあの事件の報いすら受けていらないんだ。

次に失うのは、誰だ……？

誕生日会！ その後（後書き）

さーて、次回のらき すたは？

4月も終わって、ゴールデンウィーク突入だな。

久々にゆつくりできそうだ……。

つて、お前いきなり何するんだよ！－！

次回、『ゴールデンウィーク、波乱の大合宿編』
「懇いとそれを壊すもの」

え？ クリスマス企画とかやってほしいの？（前書き）

問・クリスマスには何か予定はありますか？

かいと「クリスマスだからって何かすると思ったか？」

「マガねえ！」

まさに外

え?
クリスマス企画とかやってほしにの?

「クリスマス企画」

番外編 まさに外伝

「つーわけで神（作者）がクリスマスだから何かしろって言つてき
たんだが……」

「はいはーい！ 私は D A N Z E N 美少女野球拳 W T お前も
やるんだぞ？」 「めんなさいやりません」

こなただつて美少女の部類にはいるだろ？！当たり前だ。
決して口っこんじやない、マジで。

「そうだなー」
「いいじゃない、適当に駄弁つてれば」

ついでフリートーク開始

「えー、何話せばいいか分からない」

アリートーヶ終わつたあ

気を取り直して

「聖夜とかけまして、かいと君の生い立ちと解く。その心は？」

—それ、何がかかるているんですか?」

「おいこら、何勝手に人の過去暴露しようとしてんだ！」

「それで結局何なの？」

「そこ」まで言わると氣になるわね……」

何でみんな興味津々なんだ！？

そんなにオレの過去が気になるのか？
ていうかそれはネタばれだから。

あと 章くらい後ハタチ……。

「せめてクリスマスっぽい」と語ハナシりハナシ……」

「ふふん、そうやって逃げるのダメー」

くつ！ オレに逃げ場はないのか……。

「ていうか、オレが話したいと思つまで待つんじゃなかつたのか？」

「少しくらい聞いても良くなない？」

「番外編で！？ 微塵もシリアスの気配無ゼローーー！」

こなたはオレの服の端を掴んで離さない。

「だー！ もうこんな企画強制終了だあーーー！」

そこ4人、寂しそうな顔するな！

「今はまだ話せないけど、時が来たら絶対話してやるよ。なんて言つたつてお前らは“仲間”だからなーー！」

こつじていい感じで終わつてみたけど
結局このあとは追求されまくつたけどね！

聖バレンタイン（前書き）

バレンタイン企画

かいと達が高2の頃のお話

聖バレンタイン

しんや（新キャラ） side

2月14日

一般的にはバレンタインと言つことで一際落ち着かない状況になる。
まあこの辺は少しだけ面白かったり。

思えばこの1、2週間ほどはいつもとは雰囲気も違った。
男子の中には今まで何もしなかったのに急に女子に優しくなったり、
チョコ好きであることをアピールしたりなんてする者も多かった。
見てて面白かったけどね。

ま、そんなの僕には関係ないけど。
流石に見ているのも飽きたのでどこかゆっくりできるところはない
かと席を立つ。

『ほら！ 立ったよ！ どこか行っちゃうつて…』
『でも……』

こう見えて耳はいいんだ。
大抵の小声は聞こえる。
でも関わりはしない。
そこまで自意識過剰じゃないんだ。
それに関わつてもろくな事はないしね。

それほど愚かなことはあらうか。
いや、一つだけはある、かな……？

『ほひ、じつち見てるよー。』

『あ……』

あ……。

いつの間にかボーッとしてたかな。
その2人を見つめていたらしい。

これ以上は時間が惜しい。

そつ思い直し、僕はさつと教室を出る。

「あ、あのー」

「ん……？」

見れば先程の少女が真っ赤な顔でこちらに来ていた。
手の中には可愛らしくラッピングされた箱が一つ。

「これ……」

少女はおずおずとその箱をこちらに差し出す。

「？」

「貰つて、ください……」

僕はしばらくそれをまじまじと見ていたが
すぐに笑顔でそれを受け取った。

「ありがとう。とっても嬉しいよ

「あ……」

その子の顔は歓喜の色に染まる。
ま、その一言に周りの男から邪悪なオーラを感じけど。
僕はその子の頭を少し撫でて「かわいいからね」といって、そりだ
な屋上とかがいいかな。

僕は屋上へと足を進めた。

ギイ……

重々しい金属製の扉がゆっくりと開く。
少し肌寒いがゆっくりするには最適の場所だ。

ただ、あの男がいなければね。

その男はフローツにもたれかかり、目をつぶっていた。
一瞬、眠っているかとも思えたが流石にこの真冬にこんなところで
寝るバカはないだろう。
そう思い、同じように近くのフローツにもたれる。

「君、どうしてこんな所にいるの？」

「うるせえ」

「クラスの雰囲気がいやばっかかった？ 僕もだよ」

「うるせえ」

「君はチョコ貰った？」

「……」

とうとう無視まで始めた。

その態度はますます僕を苛立たせる。

「ここの真冬にここにいるなんて結構な物好きだね」

「……」

「バレンタインに嫌な思い出でもあった？」

「……お前、田障りだな」

「どうも」

生徒は僕をギロッと睨む。

彼の不快な態度を見ていると面白い。

生徒はスッと立ち上がり、足音荒く出口へと歩いていく。

「僕は三崎じんや。またね、倉場君？」

「……」

倉場は僕の声には何も答えなかつた。

アイツの性格だと僕の名前はそつそつ覚えて貢えそうにないね。

僕はそう思い、ポケットからさつき貢つたチョコの箱を踏みつぶした。

懶いとそれを壊すもの

身体測定を終えた今日この頃。
現在のオレ達のステータスは……

こなた	テンション
かがみ	思案中
つかさ	恥
みゆき	普通
オレ	普通

となっている。

「なんで身長が伸びてない……？」

「やつぱり間食が……ブツブツ」

「うう~」

3人はそんなことを呟いている。

「みゆきはどうだった？」

「はい。問題はありませんが少し体重が平均よりも多かったので……」

いや、それは多分胸 ハゲフングエフン

それはさておき、オレはなかなか順調のようだ。

去年からそこそこ伸びているし。

まあ今時身体測定で一喜一憂できるのも凄いな。

ここまでテンション上がり下がりが激しいのは大阪のオールきょ・」

……

それはさておき、5月も始まりゴールデンウィークである。
今年は6日も休みがある。ほぼ一週間だ。

それで、だ。

「ちゅーわけで、明日から『ゴールデンウイークや！ 先生から素敵

なプレゼントを渡したるで！」

黒井先生からありがたーい課題のプレゼントが渡される。

「先生、こんなプレゼントいつません（泣）」

こなたは泣きながら拳手する。

確かにこの課題が多いな。

終わらない訳じゃないが。

「ま、やつこつわけや。節度ある休日を過ぐすよつこー。高良、号

令ー。」

「はー」

みゆきの号令で挨拶し、HRは終わった。

「お～す、帰りましょ？」

かがみのクラスもちよづく終わったようだ。

「みんなは『ゴールデンウィークに予定ある？』

こなたは唐突にそんなことを言つた。

「オレは特に……」

「私達は家族で旅行に行くんだ～」

「ええ。だから残念ながらヒマはないの」

「私も少し田舎に行く予定があります」

なるほど。

ていうことはゴールデンウィークはほとんど遊ぶ予定はないか……。

「ちなみにこなたはみんながヒマだったりどうする気だったんだ？」

「ん？ 私はバイトがあるから元々遊べなかつたけどね～」

「つて、お前バイトしてるとかよ」

「ま～ね

……なんだろう。

「イツがやりそつたバイトが怖いくらいに見当がつくんだが……。

「アキバのコスプレ喫茶だよ？」

「やつぱりな！ そうだと思った……」

オレの勘も捨てたモンじゃなかつた。

みんなと別れ、スーパーへと向かつ。

この時間ならタイムセールに間に合ひつな。

オレはそんなことを思いながらスーパーへと急ぐのだった。

「ふう……。今日は妙に買い込んだぜ……」

微妙な達成感を得ながら家に入る。

達成したのか、これは。

まあ、そんな疑問はどうでも良く、オレはあまりの空腹を感じ急いでキッチンへ向かつた。

「さて、今日は何にするかな……と電話か?」

携帯のコールが鳴り、オレは急いで電話に出る。

「もしもし?」

『あ、倉場先輩ですか?』

「その声は……八坂か?」

『ええ。いかにも』

こなたに継ぐトラブルメーカー、八坂だつた。

「で? 何の用だ?」

『先輩はゴールデンウイークとか予定あります?』

『いや、特にないぞ』

『じゃあ、一緒に小旅行でもどうですか?』

「小旅行……」

小旅行、ねえ……。

実際、高校になつてからはそんな余裕もなかつたから行つてないな。
確か、中2に箱根に行つたときくらいか。
ふむ……。

「いいんじゃないか? オレは乗つた」

『お、ホントですか?』

「まあな、旅行なんて久しぶりだ。それにちよびりヒマしてたんだ」

『じゃあ、明日10：00に駅前集合でいいですか？』

「おう。あと何か用意するものあるか？」

『それじゃ、会費3000円徴収するんで。あとは好きな物でいいですよー』

「そうか。じゃあ、また明日な」

『ええ。また明日』

そう言つてオレは電話を切つた。

小旅行……楽しみだ。

翌日

指定されていた駅に来たわけだがそれらしい人影は見えない。

「えーっと……」

「先輩、こっちツスよ~」

「お？ 田村か」

声のする方を振り向けば田村が手を振つていた。

ちなみにこの時点で何となく嫌な予感がしたのは秘密だ。

「お前がいるつて事は……アニ研絡みか？」

「ええ。ゴールデンウィークで強化合宿らしいツスね」

何の強化だ……とか思つたが田村に言つても無駄な気がしたので言わなかつた。

そんなこんなで待つこと数分……

「遅いな……」

「遅いツスね……」

あと数分で電車が来るのが、相変わらず誘つた張本人の姿が見えない。

確かに坂はこなたと一緒に遅刻癖があつたっけ……？

「つたく……。本人が遅れてどうするつもりなんだよ……」

まあ、そんなことを呟いても何の意味もなくオレは近くのベンチに腰掛けた。

「お～、来たみたいッスよ。先輩～、こっちです」
田村が向こうの方に手を振っている。やっと来たか。
「いや～、遅れてすいませ～ん」

「まったく……。たまきがモタモタしてるから」
つて、山辺と毒島かよっ！～

ああ、コイツらもア二研だつたな……。

「お、倉場先輩。お久しぶりです」

「ご無沙汰します」

「おう。オレも誘われたんだ。合宿中はようじくな
さて、あとは八坂だけだ。

あの野郎、向こうで何か奢らせちゃる。

そして更に数分

あと数分で電車が出る時間。相も変わらず誘つた張本人の姿は見え
ない。

「まだか？ そろそろ電車出るぞ」

「見えないッスねえ」

「こつちもいないです」

「電話してみましょ～うか」

毒島がそう言った時、

「や～、遅れました～」

「「「「遅いっ！～！」」」

オレ、田村、山辺、毒島が見事にシンクロした。

「とにかく、怒るのは後で。とにかく早く電車乗りましょ～う
何故かいる永森は落ち着いてオレたちを促した。

電車内

危なかつた……。

オレが最後に乗った瞬間にドアが閉まつた、間一髪。

初日からこのバタバタ感。

一体どうなるんだ、この合宿……？

オレの不安を乗せたまま、電車は発車するのだった。

懶いとそれを壊すもの（後書き）

さて、次回の『らき』 すたは？

不安だらけで始まつたオレの『ゴールデンウィーク。

行き着く先は先行き不安な場所……。

ホントにどうなつちまうんだ、オレの休みは～～～！

次回、

「オレと後輩と疲れる休み」

オレと後輩と疲れる休み

「いやー、寝坊はしちゃいけないと思つてたんですけど何故か一度寝しちゃつて」

八坂は特に悪びれた様子もなく一人アハハと苦笑する。

無性に殴りたいんだが。

まあオレに呪いがかかつていて感謝するんだな。

「レさえなれば今頃八坂に殴りかかつていただろうからな。

「つたく。お前も部長なんだし、もう少ししつかりしたらどうだ?」

「まあ、コレがこうの性格ですので」

「うわ、ひどい」

永森は随分と慣れた口調で答える。

幼なじみとか言ってたし、いうのはもう慣れっこなんだろうな。
哀れというか何というか……。

「というか、永森は何でいるんだ?」

「無理矢理こうに誘われたんですよ……」

永森は「やれやれ」と咳いて空いている席に座つた。

「ひい、ふう、みい……。6人か? てつきっこメンツだとパトリシアもいそうな気もするんだが……?」

「あー、パティはゴールデンウイーク中はバイトらしーツス

「『シフトを入れすぎまシター』って笑つてたもんねえ」

なるほど。

確かパトリシアは留学して一人暮らしだったな。
一人暮らしの大変さはよく分かるわ。

さて、だ。

「なあ、八坂。どこに行く予定だ?」

「えつとですね、どこかの山奥の旅館です」

ソレダケデスカ？

「いやー、雑誌見てたらす」「景色がいいみたいで行つてみようかな」と

「ホントにただの小旅行じゃねーか。合宿の話はどうした?」

「だつて体裁悪いじやないですか」

はあ……とオレは溜息をついた。

八坂がまともな提案をしないことくらいは分かつていたことだつたのにな。

「と、いうわけでこの『ホールディングウェイーク楽しんじゃおー！』

「おおー！」

どうやらオレ、永森、毒島を除く3人は遊ぶ気満々のようだつた。まつたく……。六日間もコイツらのお守りをしないといけないのか。本当に疲れる旅行になりそうだな……。

なんて後悔しても遅く、電車は田舎地に近づきつつあつた……。

1時間後、

「やつと着いたか……」

オレたちが降りた駅はそこそこな田舎の中心のようだ。

見渡す限り畠やら田やらが見える典型的な田舎の景色だつた。

「ここは空氣もきれいですね」

永森は一つ深呼吸をした。

まったくだな。あっちの街中とは違うな。

「やせー、旅館つてどこー？」

「はいはい、えつとここからタクシーで10分くらいかな」

「じゃあ、私はタクシー呼んでくるから」

毒島はさつさと駅を出てタクシーを捕まえに行つた。

「いや、なかなかいいところススメ」

「そうだな。景色も綺麗だし、結構いいところなんぢやないか?」

ここは祖母の家の近所に似てるな。

なんだかんだで1年くら帰ってないけど、どうなってるかな。
今度電話でもしてみるか。

そんなことを思つているとタクシーが来たよつで急いでオレたちは
乗り込んだ。

山道に揺られて10分程……

目的地と思われる旅館に着いた。

「これはまた、凄いな……」

どう見てもこの山中に不釣り合いだろという感じの旅館だった。
どうも最近できたところのようだつた。

「さあ、行きましょう!」

八坂を先頭にオレたちはとりあえず中に入る。
ロビーもなかなか広く、ソファーやラーテーブルやらが結構な数で置
いてある。

オレは空いているソファーに腰掛けた。

「やつとくつろげるな……」

「まつたくですね」

永森も大分疲れていたのかオレの横に腰掛ける。

「にしてもここに来るまでですごい大旅行だった気がするんですが

……?」

「それはオレも同感だ」

田村もオレと同じ気持ちのようだ。

まあ、誰のせいで疲れたかは言わないが。

しばらくしてお店の人に案内されオレたちが泊まる部屋へ。

「おお、広いな」

「まあ、この人数ですし大部屋じゃないと狭いでしょう」「おお～、眺めもいい！」

窓から見える景色もなかなかで来た価値はあったかもと思えた。で、まあここまで来てやつと気付いた違和感。

「ちょっと待て八坂。お前まさか部屋を一つしか取つてないのか?」「そりですけど……。何か問題テモ?」

八坂はぼきゅっと首をかしげる。

「大問題だつつの」

「大丈夫ですよ。先輩がそんな変な事するわけ無いでしょ? ねえ、みんな?」

「「「「するわけ無い(ツス)」」」

何? オレそんなに甲斐性のない男だと思われてるわけ?

「それにもし学校側にばれても私達は助かりますし」

「うおお、「イイツ悪魔のような考え方しやがる」

「まあまあ、たつた五日間ですし大丈夫ですよ」

「何を根拠に!…」

まったく、「イイツらの自信は一体どこから来るんだ? まあ、こうなったものはしようがないよな。

「イイツらもこなたと同じで一度決めたら考えなんて改めないだろ? し。

いつの間にかオレに諦め癖がついてしまつたようだ。でも、「イイツらと一緒につてのもなんだか面白そうだし悪い気はしないな。

オレはなんだかんだで大勢でいるのが楽しくなってきたようだ。だって、「イイツらと馬鹿やつているときは、

嫌な記憶も、忘れることができるから……。

オレは一瞬浮かんだ『忘れない過去』を吹き飛ばすよつて窓の外の
景色を眺めた。

オレと後輩と疲れる休み（後書き）

それで、次回の「らきすたは？」

やっと旅館に着いたな。

まったくあいつ等、電車内で騒ぎまくつやがつて。

おかげで冷や汗かきまくつだつたぞ……。

やつこえぱいこの旅館つて温泉あるみたいだな。

次回、「温泉といえばフラグ」

温泉といえばフラグ

合宿1日目之夜。

一日の疲れを落とすためにオレたちは旅館の名物の一つ、温泉に入ることにした。

この山から出た天然温泉のようで何でも美容効果があるとか。それで女子連中ははしゃいでいるわけだ。

まあ、なんだかんだ言つてコイツらもそれなりの『年頃』なんだそうだ。

「そういえば、この前かがみがダイエットしてるの聞いたんだけどさ。お前らもそういうの気にしたりするわけ?」

「当たり前ですよ!!」

「女の子にとつては死活問題です!」

「気にしない人なんていないですよ~!」

「女性が一度は通る道です!」

「急っちゃ負けッス!!」

計5名に大声で叫ばれた。

かがみもコイツらも太つてるとは言えなによつなんだがな……。なんでそんなに気にするんだろうな。

「はあ。先輩は女心が理解できない鈍感な方だつたんですね……」ハ坂の一言にみんな納得してしまったのかうんうんと頷いてくる。オレは男だから理解できないのは当たり前だ。

「ていうか、そこまでしてダイエットする意味あんのか?」

「それは大ありますよ」

「女の子は男の子にカワイイ見て貰いたいものなんですよ~」

「人は中身つて言つても第一印象は外見ですね」

「外が悪けりや、中を見てくれる人もいなイッス」

「ふうん……。オレは別にお前のこと可愛いと思つけど?」

あれ？ なんでみんな顔が赤いんだ？
何か変なことでも言つたかな……？

「なあ、どうした？」

「な、なんでもないです！」

「さー、行きましょう！－！」

「？」

よく分からんが元気ならそれでいいか。

女子連中と別れ、一人男湯の暖簾をくぐる。

しかし、入り時ではないのか入浴客はまったく見えない。
オレの貸し切り状態だ。

さて、ある程度説明をせて貰おつ。

ギャルゲーなどにおいて旅行というのは非常にフラグの立ちやすい
状況であるといつこと。

そしてその目的地が温泉であることで確率は跳ね上がる。
更に、だ。現在、この温泉に宿はない。
絶好のフラグ建設状況だ。

しかし、オレは忘れていた。

まさか、現実でそんな事が起こるとは想えていなかつたからな……。

カポーンといかにもな効果音が流れる。

なんだこの音は。

「しかし、絶景だな」

現在、オレは露天風呂にいる。

ここからみえる風景は部屋とはまた違つて風情がある。

男湯と女湯を隔てる柵。

『修理中、触れないでください』といつプレートが掛けられている。

オレはゆっくりと柵から離れた。

こんなところで死亡フラグなんぞ立てたくないからな。

オレはしばらく周りの風景を眺めながら温泉を堪能していた。

やまと side

先輩と分かれて女湯へと入った私達は早速、この旅館の田舎である露天風呂へ向かった。

「おお～！ なかなかだね」

流石のこの景色に感動したのかあちらこちらを眺めては頷いていた。

「いや～、みんななかなか可愛らしいおつぱ……痛あつ！」

「何考てるのよー セクハラじゃない！？」

私はこいつの脳天に拳を叩き込んでいた。

長年の付き合いからしてこの性格はよく分かっている。

景色は景色でも別のものを見ていたのね……。

そんなこいつは放つておいて私達は温泉へと浸かる。

「は～、あつたかあつたか」

「ホントツスねえ。あつたかあつたかツスよ」

「あんた等2人、もう少し自重しな」

あっちの問題児2人は毒島さんに任せて大丈夫そうね。

久しぶりにくつろげる、と思い私は思いきり足を伸ばしたのだった。

流石にこんだけ浸かつてるとのぼせてくるな……。
オレはゆっくりと立ち上がり、更衣室を手指した。

「ま、何事もなくて良かったな」

実際、オレも何が起こるかと不安だった。

何せ、死亡フラグが何時立つてもおかしくない状況だつたのだから。オレは無事この修羅場をくぐり抜けられた事に安堵の溜息を漏らしながら部屋へと向かつた。

女子連中はまだ温泉だろうし、早めに戻つて一人ゆっくりするのもいいだろ?。

そんなことを思いながらドアを開けたのだった。

。

『あ……』

「え……？」

イツツ ア 着替えたいむ。

全員が着替える手を途中で止め、真っ赤な顔で一いつひらを凝視している。

なるほど。やつきのはこれの複線だったわけだな。

「なんだ、そういうことか。騙され いふうつ……」

何か固い感触が額に当たったと思つたとき、オレの意識は闇に沈んだ……。

温泉と「記憶」（後書き）

それで、次回のらき すたは?

いてて……。

なんだ……? なんかアゴ痛いし。

つーか、リリル……?

次回、
「記憶、その断片」

スランプ中ですこません

「宿編はこの回でおしまいです。早いなー。
ちなみに次章に続きます。
まあ大体の理由は続きが思いつか
でさじつけ。

記憶、その断片

「……？」

オレは気がつくと布団の上に横になっていた。
なんでこんなところにいるんだ……？

確かに昨日はこの旅館に来て、

それから温泉に入つて……。

部屋に戻つて、それから……なんか桃源郷を見た気がしたんだが……。

桃源郷……。

女子連中のは……。

ヤバイな。

顔から火が出そうだ……。

そうか、なんてタイミング悪かつたんだオレは……。

コイツらが起きたら謝つとかないとな。

オレはコイツらを起さないようにそつと立ち上がり、備え付けのポットからお湯を注ぎ、緑茶で喉を潤した。

数分経つて全員が起床したところでオレはDO・GE・ZAしてい

た。

「昨日は誠に申し訳ござイマセンでした」

「あー、いや、あのー私達もタイミング悪かったですし?」

「いや、ホントにスマン。何でもする」

「ホントですか?」

……今、一瞬目の色変わったぞ。

「“何でも”するんですね?」

「ああ……なん……でも」

何でもやってやるわ……

さて、だ。

そもそも、浴場で着替える場所はあったのに何故アイシラが部屋で着替えていたかという疑問だが。

何でも、温泉に行つたはいいが着替えのための浴衣を忘れてしまつていたらしい。

それで部屋に戻つてもオレはいなかつたため、戻つてくる前に着替えてしまおう、と考えたがタイミング悪く、オレが来室してしまつたというわけだ。

よく分かつたかな?

そして、場所は変わって近くの山の見晴らしのいい場所。
山の一角にあり、柵の向こうには平和な田園が見えるいい場所だ。

「いや～、絵に描いたよつた場所ツスね～」

「ホント、漫画の舞台みたい」

「やや、先輩。よろしくおねがいします」

「……了解です」

オレは何故か敬語になり山辺から小冊子を受け取る。

「なんだ、これは？」

「台本ですよ」

「何の？」

「漫画のです」

「はあ？」

どうじうじうじうぢゅや。

とりあえず、中身は大丈夫なんだろうな。
パラパラと流し読みする。

「大丈夫ですよ。Rで18なのではないです」

「よかつた……」

ほつと安堵の溜息。

「今度の夏ノミの案ですよ。先輩に再現して貰つてより臨場感を出

そつかと」

「臨場感で……」

でも、これ男女一組みたいなんだが……。

「そこはやまとにお願いするんで」

「んなつー?」

永森が驚きの声を上げる。

「聞いてないわよそんなのー!」

「だつて言つたら怒るでしょ」

「当たり前じやない!」

永森、その気持ちはよく分かるぜ……。
実際オレも怒りたい気分だ。

「つー! 今回だけよ……」

どうやら負けたらしい。

ゆっくりとじみちに歩いてくる。

「悪いな。終わったらジューク奢るから」

「ありがとうござります」

さあ、ひとつと終わらせるか！－

舞台は田舎。

2人は兄妹。

オレはそつと永森の手を握り、優しく問いかける。

『この村は、好きか？』

『……好き、です』

『そうか、俺も好きだよ。こんなに狭い村でも2人でいられるから』

『はい、ずっと……一緒』

『お兄ちゃんと、一緒に』

ゾクッ

「はっ……はっ……」
「あの、先輩？」

やまと side

先輩は目を見開いたまま、私を見ている。
どうしたのかしら。

「あの……」
「い、やだ……」
「え？」

嫌？

いつたい何が？

他のみんなも先輩の異変に気付いたようでこちらに駆け寄ってくる。

「どうしたの？」

「いや、先輩が……」

先輩はゆっくりと後ずさり、尻もちをついた。

「頼む……許して、くれ……！」

「？ 許す、って何ですか？」

田村さんが先輩の肩に手を伸ばした。

その行為に先輩はビクンと身体を震わせて更に後に下がった。

「やめる……やめてくれっ！！」

先輩は頭を押されて地面に横たわった。

「先輩！？」

「ちょ、何があつたの！？」

もづ、こんなことをしている場合ぢゃない。

私どこのは急いで旅館に向かい、手助けを呼んで先輩を旅館に運んだ。

ドクツ

「はつ……」

オレは目を覚ました。

そうか……。

確かアニ研の合宿旅行の付き添いに行つて、それから倒れて帰つてきたんだっけ……。

少しボーッとするな。

水でも飲むか。

オレはそう思い、台所へと向かつた。

たつた3行空いただけだがだが「ゴールデンウィークは終了した。
そういうことにしてくれ。

「やほ」。かいと君、ゴールデンウィーク中は大変だつたらしいね
え

「うるさいな

こなたは二マニマ笑いながらオレを小突く。

「だいたい、誰から聞いたんだ?」

「ゆーちゃん経由でひよりんだよ」

「そつか……」

そういうえば、何故オレは倒れたんだっけ……?

なんか倒れる前後の記憶がないな……。

確か、田村の漫画のモデルをしてて……それから……。

それから……？

朝から脳裏に響く幼子達の声。

オレを、兄と呼ぶ声。

オレを呼ぶ声。

懐かしい声。

「つー」

頭痛のする頭を押さえながらオレはこなたと共に教室へと向かう。オレとこなた以外のメンバーは揃って話をしていた。

「よつす」

「おはよー

「ああ、おはよう」

「2人ともおはようー」

「おはようござこます」

ほんの少し顔を見なかつただけなのにだいぶ間が空いたように感じられる友人達の顔。

「いやー、まだ五月だけど暑くなつたねえ」

「ホントよね。私なんて休み中は半袖で過ごせたわよ

……」「んな、普通の日常なのに。

オレは、何を望んでいるんだ?

昨日から頭痛と共に脳裏に流れる過去の記憶。
オレの、罪の記憶。

「イツラがオレの過去を知つたと、どうする？」

「イツラだけじゃない。」

みんな、3年になつて知り合つたみんな。
もし、オレから離れていつたらどうする？

いや、きっと離れていくだろ？

軽蔑されるだろ？

オレは、怖い。

一人になるのが、怖い。
もう、慣れたと思っていたはずなのに。
一人が今まで普通だつたのに。

オレは……

「かいと君？」

「どうしたの？ ボーッとして」

「ちよつと変よ？」

「具合でも悪いんですか？」

「あ……。何でも、ない」

「「「？」」「」」

本当なら、オレが触れていいはずがなかつた。
いつか、あの時のようになつてしまふんじやないか……。

クソッ！

オレは……オレは……！

ふとHRの予鈴が鳴り、我に返る。

また発作が……。

「つと、私はそろそろ戻るわね」

かがみは立ち上がり、隣のクラスへ戻つていった。

その後もオレはずつとうわの空だつた。

授業はもちろんこなた達の声も聞こえないし、昼食だつて口クに食べられなかつた。

いつもと調子が違つオレに流石におかしいと思つたらしく、こなた達はオレに

「大丈夫？ 今日はずつとボーッとしてるみたいだけど
「やつぱり大丈夫じゃないんじやないの？」

「どうかしたの？」

「もし体調が悪いようでしたら保健室に行つた方が……
「コイツらに、迷惑はかけたくない。」

オレの秘密を知れば、きっと重荷を背負わせてしまつ。

そんな思いはさせたくない。

だから、このままでいいんだ。

そり、このままで……。

このままで、いいんだ……！

休み明けの地獄

「ゴールデンウィークの事件から一日経ち、すっかり心を入れかえたオレはいつもどおりの朝を迎えた。

いつも通りとこなたの家ももちろん、いつも通りの時間に起床し朝食を取つて準備をして駅へ向かう。

そして途中でこなたと小早川を誘い、途中の駅でかがみとつかさを拾う。

あとは学校付近でみゆきと落ち合つ。

あとは小早川をと分かれオレたちの教室へと向かう。

まあ、ここまでは同じだ。

教室へ向かう途中には学年の掲示板が存在し、そこで最近のイベントなんかが張り出される。

かがみはふと一つの項目に目をとめた。

「月曜日から休み明けの実力テストよね。こなたはちゃんと勉強したのかしら~?」

いつもこなたにからかわれている腹いせだらうか、妙にいい顔をしたかがみがじりじりとこなたに迫る。

こなたは冷や汗をかきながらふいと顔をそらす。

まあ、こなたは絶対に勉強してないな。

アイツがテストごとに精を出すなんてないからな。

ましてやゴールデンウィーク中はゲームばかりしていただろうし、テスト勉強なんてしているわよ……

「実力テストおー!?」

オレは掲示板を凝視する。

そこにはでかでかと来週の月曜日と火曜日の日付に実力テストと書かれていた。

オレの大声に驚いて4人はおろか周りにいた生徒や教師もオレを見ていた。

「あの〜、かいと君。そんな大声出してどうしたのかな？かな？」

「実力つて……月曜から……？」

オレはわなわなと手を振るさせて何度も掲示板と携帯の日付を見る。間違いない、今日は実力テスト三日前だ。

「アンタ……まさか……」

「忘れてた、とか？」

「そのまさかのようですが……」

4人とも、オレを同情的な視線で見ている。

どうでもいいが、こなたやつかさにそんな顔されるのは腹立つ。

それはさておき、だ。

『「ゴールデンウィーク中はいろいろあつて勉強してるヒマなんてありませんでしたー』

なんていい訳通用しない。

常日頃から勉強しておけばいい話だからな。

というか、そんなこと黒井先生に言えば殴られそうだ。

「じゃあ、ベタだけどまたみんなで勉強会するのは？」

こなたさん、鶴の一聲。

まあ、こなたの場合は「ゴールデンウィークで終わらなかつた宿題を終わらせたいだけだろうが、だが、なかなかいいアイデアだ。

テストの前の土日もあるし、今回も頑張ればなんとか間に合つ。

てなわけで、放課後。

「ちちやーちちやーしていた部屋を片付けてできるだけ勉強のできる環境にする。」

ちなみにゲーム関連はこなたの手の届かない所に置いてある。文字通りにな。

まあ、なぜまたオレの家なのかは前回と同じであまり迷惑がかからぬいからだ。

だいぶ片付けも済んだところでタイミングよくインターホンが鳴る。

急いで玄関へ向かい、ドアを開ける。

既に4人揃っているし、これならすぐに始められそうだ。

「と、いうわけでとりあえず休み中の宿題を見せてくれないかな？」
この小動物は予想通りというかなんというかやはり宿題を[与]しに來たようだ。

「私もできるなら見せて欲しいな〜」

えへへ、と笑いながらつかさもこっちを見ている。

その様子だとかがみには断られたみたいだ。無理もないか。

若干の罪悪感を感じつつも宿題は[与]させなかつた。

なぜオレが罪悪感を感じなくてはいけないのかと思ったのだが感じたものは仕方ないのである。

とりあえず、勉強会を始めるが思つた通りこなたは30分もしないウチに立ち上がり、オレの本棚を物色し始めた。

ラノベのスペースを避けてしているのは気のせいではないだろう。

「お前さ、今さら思つたんだけどラノベとかは読まないのか？」

少し余裕ができたので伸びをして、立ち上がりこなたと同じく本棚を見る。

田についた一冊を抜き取り、適当に流し読みする。

「こなたはラノベは読まないのよね。漫画とアニメしか見ないのよ

「へえー。意外だな」

かがみがニヤニヤ笑いながらこなたを見るのに便乗してオレもこなたを見る。

こなたはバツの悪そうな顔をして一冊の漫画に顔を埋めた。

「むう。見るものが多いからなかなか読めないだけだよ」

「オレはお前と同じくらい見てるけど普通に読めるだ

「ぐ……」

その後、熱くなつたかがみも交えてラノベの良さなんかを熱弁したのだが何故かみゆきが落ちてオレの棚にあつたラノベを何冊か読み始めた。

やつぱり勉強のできる人はこんなぎりぎりに勉強しなくてもいいんだな……。

あの才能が憎い！！

その間、つかさは一生懸命取り組んでいたようだがほんの少ししか進んでいくなくてつかさの手助けに随分と時間を食つた。

気付けばとつぶくに6時過ぎ。

あまりに入りこみすぎて時間が経つのを忘れてしまつたらしい。

「遅くなつちましたなあ。帰るとき大丈夫か？」

いくらなんでもこんな遅い時間に女子を帰すのは危ない。
少し手間になりそうだが送つていくしかないか……。

「あー、大丈夫だよ。みんなここに泊まるから」

「ああ、それなら大丈夫か」

オレは座り直し、つかさの課題を見る。

「つて、ちよつと待てえい……」

妙な違和感に気付き、大声を出す。

「何？」

今のおれの叫びにまつたく疑問を持つていなかの、このナビは…
「泊まるつてどういうことだ!!」

「泊まるつていうのは自分の家じゃなくて別の場所で一夜を明かすと
いう事だ」「そんなことを聞いてるんじゃねーし!!」「
みゆき、それは天然なのか！ それとも狙ってるのか！？

オレが聞きたいのはそういう事じゃなくてだな！

「何でオレの家に泊まるのかって事だよ!!」

「だつてできるだけたくさん勉強したいじゃん？」

勉強してなかつただろうがお前は。

「つたく……。そいつ」とだつたらかがみとかが止めそうなモンな
んだがなあ……」「

「だつて、面白やうじやない？」

かがみはときどきこういういつ事考えるからなあ。

運が悪かつたといつか……。

つかさもみゆきも乗り気みたいだし、今さら追い出せもしないだろ
う。

「だから今日のお前らの荷物は無駄に多かったのか……」

「ナイス推理！」

こなたはGJ!と親指を立てている。

腹立たしい。

「つーか、家に5人分も食材ねえよ」

日々買い出しに行こうと思つていたからこの5人の腹を満たすほど
はないだろう。

特にかがみ。

「何か変なこと思った……？」

「何でもないです」

かがみが鬼の形相でこちらを睨んでくる。

ホント勘が良いよな。

しかたないな。少し遅いがスーパーに行けば何とかなるだろ？
「オレ、ちょっと買い物に行つてくるから。お前らは待つて」

「あ、それだったら私も行くよ」

「あ、私も」

「私もいっしょに行くよ」

「私も」一緒にさせていただきますね

うん。

まあいいや。

「あー、お腹いつぱい」「かがみは満たした腹をさすりながら言った。

あの後、急いでスーパーに行つたオレ達は何とか残っていた食材を買つて夕食にありつけた。

どうこうワケかオレが作ったのだが。

アイツら（かがみ除く）も料理できるだろうに……。

でも、「アイツらに喜んで貰えたなら悪い気はしないな。

「ああ、お前ら。さつき風呂沸かしといたから先に入れ」

いくら何でも客を待たせるわけにはいかないし、男のオレの後じや嫌だらうしな。

「お～、じゃあお皿葉に甘えて」

「あ、でも入れるのはせいぜい2人くらいだからお前らなら2回こ分けないとな」

キッチンの蛇口を捻り、ざつと皿を濡らす。

居間の方ではジャンケンをする声が聞こえた。

皿洗いも一段落し、もよおしたオレはトレイに向かつ。

風呂の横にトイレがあるために音が応でも風呂場の声が聞こえてくる。

『いや～、かがみんのはおつきいねえ』

『う、うるさいな！ こっちみんな！』

……なんてうらやま、恥ずかしい会話をしているのでしょうか。

アイツらが好きでやつていることだし口出しするのもアレなんだがもう少し自重して欲しい。特にこなた。

下着等を片付けるために脱衣所へ向かった。

2組目が入っているところでかなり抵抗はあったが頑張った。頑張る必要なかつたけど。

とりあえず、煩惱を生まないためになるべく聞かないようにしていたんだがやはり聞こえるものは聞こえる。

『ゆきちゃん、改めてみると凄いなあ……』

『いえ……そんなことは……』

……消えろ、煩惱。

こなた達もそうだが、この家にオレがいることを忘れないで欲しい。男には結構キツイぞ。この状況は。

「ふう……」

2組目も上がり、ようやくオレの番が来た。
まったく、オレの精神力が強かつたからよかつたもののそこの男
だつたら理性なんかとうに吹き飛んでるぞ……。
そこら辺のこともアイツらには一度言つておく必要があるかな……。
そんなことを呴いてうんづんと頷くオレは決して怪しい人物ではな
い。

「ふう。さっぱりしたなあ」

まだ火照る体を団扇で扇ぐ。

この時期の風呂上がりは暑いな。

「かいと君、おかえり~」

「またお前は……」

こなたは何をやつているかと思えば勝手にゲーム機を取り出してか
がみどピコピコやつている。

かがみ、なんでお前までやつているんだ。

「なー?『こなたが一戦だけしない?』とかいつからいじらやつただけよー。」

「既に10戦

■

「既に10戦くらいやつていいみたいだからがみは」のテのゲームはやるらしい。

こなたには遠く及ばないみたいだが。

でも、ハーナビテスナ前つて事を

シテモヒニシニノ前一事を原林一がいわ

その後、しばらく勉強会を進める

そしで黙々と経て10時過也

一ノ二
第三回

その横ではみゆとも眠そうな顔をしている。

『 』 『 』

「そうね。明日もあるんだし早く寝ましょ」

テ一ハリを端は逃げて右回り轉けるノハ一ノを作る

「うひでりきりとおのづかの部屋へでしな」

「モード」

「でも、オレが一人でベッドで寝るつてのもな……」
呂等の水回りくらいしかない。一人暮らしだからいいんだけど。

「アーティスト」

つかさがこんな解答した

つかさがこんな解答したのは天然なのか寝ぼけているのか。

まつていた。

つかさとみゆきは眠つてしまつたがオレ、こなた、かがみの3人に
とつて夜はまだまだ浅い。
とはいへ、電氣を付けてしまつては2人の眠りを妨げてしまいかね
ない。

だから勉強もできない。

だから適当に雑談をすることにした。

「お前らと会つて一ヶ月とちょっとが経つたわけだな
「まだ、お互いの腹の内も分からぬ状態だけネ」
「腹の内つてアンタ……」

まあそうだよな。

分かると言つても相手の性格とか表層的な家庭の事情とかそういう
類のものばかりだ。

「それはそうと、つかさもみゆきさんも無防備だよね。男の子の部
屋でぐつすり眠っちゃうなんて~」

「またアンタはそんなことばかり……。まあ、かいと君だから大
丈夫だとは思うけど」

オレはそこまで甲斐性のない男だと思われているのか……。
少し悲しいぞ。

「そういうの、じゃなくて、かいと君を信頼してるつて事でしょ

「……何だそりや」

「かいと君は私達が嫌がる事なんてしないもの。だからじゃない?」
。

まあ、意識してるつもりはないんだけど。

確かにコイツらが嫌な思いをするのはお断りだ。

それが守れるなら、なんだつてやつてやるわ……。

もちろん、そんなこと恥ずかしくて言えないけど。

「さて、私達もそろそろ寝ましょ？」

「そだね～。もつやることもないし」

「やうだな。おやすみ」

もたもそと布団を被り、田を開じる。

そうだ……。

オレは、みんなで「ひこにうるんだ……。

幸せな思ひを噛みしめながら、オレはゆくへつと開けつつの世界へ落ちていった……。

翌日があるや

「ん……？」

不意に感じる衝撃に目を覚ました。

とりあえず手探りで時計を探すが辺りにはない。

ふにっ

……？

なんだれ?。

何かスゴイ柔らかい。

何だコレは。

「んん……」

誰かの声と共にその柔らかい何かが動く。

いい加減その何かを確かめるために掛け布団をめくつあげる。

「何だこ! うづつ! ?」

オレが触ったもの……

それは、男の浪漫です。（御想像にお任せします）

みゆきはオレが触ったのにも関わらず、いつも通り寝息を立てている。

後で謝つておくか……。

とりあえず時計を見るとまだ6時。

平日ならば遅刻で騒ぐのだが、今日は土曜日だ。ゆっくり休める。

マイシラももう少し寝かせておくか。

起きれないよう立上り、そわそわとキッチンへ向かう。
さて、今日の朝飯は何にするかな……。

おつと。沸騰してゐる。

急いでコンロの火を消した。

それと同時にかがみがキッチンへ顔を出す。

「おはよう、かいと君

「おう、おはよう

目元を「じご」と擦つての辺りまだ寝起きなんだろ？

「手伝おうか？」

「いや、それより先に顔洗つたらどうだ？」

「手伝うなって言いたいの……？」

かがみはゆっくりと拳を構える。

そういうつもりじゃなかつたんだけど……。

「そうじゃなくて、あんまり寝ぼけてても危ないし。顔洗つて目覚

ました方が良いだろ？ それに綺麗な顔が台無しだぞ

「！？ そ、そうね！ ちょっと行つてくる……」

かがみはそそくさと洗面所へ向かつた。

顔が赤かつたが寝起きの顔でも見られて恥ずかしいんだろう。
オレだつて寝ぼけている顔をあまり見られたくないしな。

うんうんと一人解釈して頷いているオレは怪しい人物ではない。

既に時間は7時を回つてゐる。

流石に起こした方が良いだろ？

「ほら、起きろ！ もう7時過ぎてんだぞ！」

いへり休日とはいえ、これまでいつも寝かせてもらひれない。

一応テスト前だからな。

「あと5分……」

「ふみやー

「ん~……」

「あんた等……」

かがみはあまりのだらしなさに呆れでいる。

「しかし、この二人はともかくみゆきはひとつ起きてしまったもののせいか、なんだがな」

「……そういえばそつね

やつぱり昨日の夜は眠りだつたしそのせいだらうか。

だが、このまま見過ごすのもいけないよな。

軽く頬を叩き、強制的に覚醒させる。

何回かその行為をくり返すとやがてゆづと身を起してした。

つかせねこへり起しても起きなかつたけど。

「申し訳ゴザイマセンでした」

すっかり慣れてしまつたR.O.G.E.N.A.

いきなりのことに状況の把握ができていないうつな三人ではあつた
が知らない方が良いだろ？

「さて、こなた。朝食運ぶの手伝ってくれ

「りょーかい

朝の定番の白飯に味噌汁。

作りたての味噌汁の匂いが鼻を突く。

「「「「いただきま~す」」」

とりあえずみんな味噌汁へ手を伸ばす。

「お~、美味しい

「ええ。どつても美味しいです」

こなたもみゆきも感嘆の声を上げている。

「流石だネ！　かいと君」

「いや、オレは残念ながら作ってないぞ？」

「じゃあ……」

「わ、私が作ったのよ。ヒマだったし……」

かがみは赤面して頬を搔いている。

料理が苦手って言つてゐるわりにはなかなか器用だつたな。

「そう言わると美味しくなく感じるは何でだら」

「何だとー？」

オレもみゆきも苦笑である。

さて、朝食も済んだとこりで再び勉強会へ。

「かがみ～ん。じじょまざつなるの？」

「えつと、そりせ……」

こなたは数学の問題に苦戦してこりゆつだ。
まあオレも同じだけ。

「みゆき。じじょまざつすればいいんだ？」

「はい。やじほじほたちの公式を使ってですね……」

「みゆきわ～ん。じじょまざつすればいいのカナ？　カナ？」

「それは、まぢこつちを訳せないとこはないので……」

現在は英語。これは結構難しいといひなので無理もないだろつ。

「これはこいつすればいいんだっけ？」

「かいと君。これつてこつでよかつたかしら？」

「ああ。そこはオレもわづ思つたし、あつてゐんぢゃないかな」

「かいとく～ん。じの年表はまざつするの～？」

今は世界史。

特に難しくも何ともない。むしろ一般常識といつても過言じやないくらい有名な時代の年表だつた。

「今まで戻らしてたけど、お前いつもみたいに答え戻してるだけじゃねえかっ……」

何のための勉強会だと思つてるんだ、このチビは……
……いや、真面目に答え戻してるだけでも進歩といえるんじゃない

か？

「って、ええい！ んなもん進歩と呼べるか！

「お前、たまには真面目に解いてみるよ」

「大丈夫だよ。私には一夜漬けがあるし」

「こなたはそう言って無い胸を張つた。

「かいと君？ それだけでこなたがどうにかなるなら私達がどうく

「どうにかしてるわよ」

「……それもそうだな」

「納得してしまつんですね」

みゆき、苦笑。

ちなみに「つかねば」のあと起きました。

オレたちは昼食を。

つかねば朝食とも昼食とも言えるものとひる。

今朝の残りに軽く1、2品増やしたものだが。

昼食も済ませ、つかねばも交えて本格的に勉強会を再開。

しかし、つかねば寝起きで、こなたは最初からやる気が感じられず
勉強会は渉るどんとかむしろ滞つていて。

そしてなんやかんやでとっくに9時過ぎだ。

「ふわあ～」

つかさは大きな欠伸を連発する。

かがみ曰く、『平日ならとっくに寝ている時間』だそうだ。

「ね、眠くて……。落ちる……」

こなたは後半から異常な頑張りを見せたが普段から集中力がないためすでにダウン状態だ。

まったく……。

こんなんで、大丈夫か……今度の実力テスト……。

明日があるさ！！

なんて思つても後の祭りだ、との2人に言いかつたがそんな気は起きなかつた。

欲する者と欲せざる者

実力テストが終わり、色々あつて5月下旬に差し掛かつた。随分と時間をすつ飛ばしたみたいだがオレは気にしない。

テストの結果については聞かないでくれ。

梅雨が近づいてきてなかなか天気にならず、憂鬱な気分だ。しかし、そんな「機嫌斜めな天気と違つてこなたは随分と」機嫌のようだ。

「コイツのこの異常なテンションは何だ……？」

「あ…………？」

オレもつかさも首をかしげるばかりである。

ちなみにみゆきは委員長の仕事。かがみも同じくだ。

「むつふつふ。何故か、知りたいかね少年」

「いや、別にそこまで知りたくは……」

「お願いだから聞いてよ～！」

初めからそういう言えばいいのに回りくどいことをするな、この小動物は。

「で？ 何が原因なんだよ」

「何を隠そう、数日後には私の誕生日なのだよー」

「……あ〜、そういうえばそうだね！」

見る限り、つかさは本気で忘れていたようだ。

オレは……知らなかつたからノーカンてことで。

しかし、「コイツが今さら誕生日」ときでこんなに喜ぶか……？

「だつてこれで堂々とHロゲできるじやん？」

「Hロゲ！？」

「お前今までだつて堂々としてたじやん……」

「これで堂々と買えるんだよ」

買えないだろ。

……見た目的に。

こんなのが『エロゲーださー』って言つても絶対売つてもうれしないな。

「失礼なこち「考えてません。『メンナサイ』……ホントかな」

「でも、誕生日だつたらお祝いしないとね~」

「そりなんだよネ。家でパーティするからつかわもおいでよ」

「うん! 行くよ~」

「ついでにかいと類も一緒に」

「オレはおまけか……?」

わつきの仕返しどばかりにニヤニヤ笑つている。

腹立つなこんにゃく。

しかし、誕生日か。

やつぱりプレゼントとか送つた方が良いのか?

とりあえず今度の休み辺りにそこら辺の店でも見て回るか?
なんてことを考えていたら予鈴が鳴つて一瞬吃驚したが。

休日。

いざ、外に出てみたもののこなたが何を欲しがつているのか分から
ない。

まあ誕生日プレゼントなんだから貰えれば嬉しいだろうがやはり欲
しいものを貰えた方が倍嬉しいよな。

「でもオタグッズは流石に……」

ここはやはり無難に小物の類かな。

オレはそう思い商店街の方へ向かつた。

『素通りだとおおおおおお!~』

何か叫び声が聞こえた気がするが氣のせいだろ。

商店街のアクセサリーショップ。

入るときは若干の抵抗があつたが別に普段からもつと偏見ありそ
なところに入りしてから別にいいやと思いつ中に入つたとい
う種類がありすぎて分からない。

ところかオレは女子にプレゼントとかそういう類の経験はつきり
言つて皆無だ。

女子……といふかこなたは何を貰つて喜ぶんだ？

「深く考えすぎるからいけないのかもな……」

別に誕生日プレゼントに男も女も関係ないだろ？
まあ最低限の境界はあるかもしれないが大抵はそんな感じだ。
だったら簡単。オレが貰つてうれしいと思うものを渡せばいい。
それだけだ。

そう勝手に結論を出し、適当に店内を物色する。
ふとバングル系の棚に気になるものを見つけた。

様々な色の流れ星を象つたガラス細工付きのものだ。
青、緑、黄、桃、黒。

その5色が一際異彩を放つていた。

そつと手に取ると、なんだか懐かしいような、どこか悲しいような
気分がした。

直感だつた。

これが似合つと思つた。

オレはそれら5つのバングルを棚から取り出すとレジへ向かい、
青、緑、黄、桃の4つにラッピングをして貰い、黒はオレの手首へ

着けた。

他のヤツらの誕生日にも「レ」をあげよう。

こなたはきっと、青が似合ひ。

つかさは緑が合いそうだ。

かがみは黄色かな。

みゆきは桃だ。

そして、オレは黒だ。

みんな、喜んでくれるだろうか。

オレは後日に行われるこなたの誕生日に胸を膨らませつつ、帰路を
急いだ。

なぜ、オレがアクセサリーを選んだと思つ?

偶然? あるいは必然?

恐らく後者だわ。

もう一度とあんな思いはしたくない、させたくないから。

これなら、きっとどこにも行かないだろう?

これだけを見たりなんか、しないハズだから……。

追いかけたりなんか、しないから……。

君が存在した奇跡

こなたの誕生日当口。

休みの日という事で、こなたは朝から出かけているらしい。

そんでもそのままバイトに行つてから誕生日会、といづスケジュールみたいだ。

ということでお手が必要、といづ感じでオレが駆り出されるわけだ。そうじるうさんがいるだろに……。

とはいえ、仕事の〆切が近づいていて流石に仕事を放棄するわけにはいかないのでオレがやる事になつた。
〆切直前にそんな事してていいのか……。

「お邪魔しまーす」

泉家の門をくぐる。

表には自転車が一台止まつていたのかがみとつかさはいるのだろう。

「おっす。かいと君」

「かいと君、こんにちは~」

「おう。準備の方はどうだ?」

「まあぼちぼちね」

居間はそこそここの装飾がなされているし、料理も下準備が大体できている。

「時間もまだまだあるし、これなら余裕だな」

袖を捲りあげ、キッチンの方へ立つ。

まあ、つかさ一人でもできるだろうが一人でやつた方が早く終わつて装飾もできるしな。

料理はこなたが好きそうなものばかり並んでいる。

油濃そうなものばかりだが誕生日くらいはこんな贅沢させてもらひ

いだろ~。

途中でみゆきや成美さん、出かけていた一年生組とも合流し着々と準備は進む。

誕生会一時間前で無駄にヒートアップした準備は終わった。
そつじゅりひさんも何とか仕事を終えて居間へ集合。
あとは主役を待つだけだ。

時計の針がちょうど7時を指した頃、ドアを開ける音がある。

「お、帰ってきたか」

「じゃ、みんな作戦通りに行くよー？」

成美さんの声にオレたちは無言で顔を、クラッカーを構える。

「ただいま『パンツ！』って、うわー！」

流石に扉を開けていきなりのクラッカーはびっくりするな。
しかし、こなたはすぐに笑顔になる。

「誕生日おめでとう」

「こなたさん、おめでとうございます」

「こなちゃんおめでとー」

「いやー、みんなありがとねー」

こなたは柄にもなく照れている。

こなたのこんな顔が見れただけでも来た甲斐はあったよな。

その後も華々しい感じで誕生会は過ぎていく。

さて、御馳走も腹八分目にとどめたところで本丸の手作りケーキだ。
つかさがこの日のために作つてきた大作。

家庭手作りではそこそこ難しいんじゃね？的な2段ケーキだ。
見栄えもかなりいいし、いかにも店で売つてそうな感じのものだ。

てつぺんの所にうつそくを立てる。

部屋を真っ暗にするといつそくの明かりがこなたの顔を照らしている。

こなたは大きく息を吸い、くわくわくを一気に吹き消した。パチパチと拍手が起る。

ケーキも完食し、いよいよプレゼントを渡す事になる。まずはつかさ。

「私はぬいぐるみ。本当はこれも手作りしたかつたけど流石に時間がなくて~」

どんだけ手の込んだ事してるとんだよ……。

次はかがみ。

「私は、まあ無難にバッグとかね。アンタはこの前いい感じのが欲しいでいいから」

やつぱり細かいところをついてくるな……。

次はみゆき。

「私は安眠用のじロです。こなたさん、最近寝不足のようでしたから」

みゆきは相変わらず気が利くな。

次の一年生グループ全員で出し合って買つたらしい。

「私達はお姉ちゃんにお洋服を貰つてきました」

「ですが、その……」

小早川と並崎は少しやりにくそう。

「いや~、なかなか悩んだッスよ。泉先輩は選択肢が山ほどあるシスから!」

「オカゲでコスプレショッピングでジカンもタッていましたね~。いかん……」「イツらの考えが手に取るように分かる……。

取り出されたのはどこかで見た事あるようなコスプレ一式。

「いや~、コスプレはあまり趣味じゃないけど嬉しいよ

「嬉しいんだ……」

ちなみに成美さんは奇妙なダンスを披露。

そりゃうさんはあとで渡すと言っているがアブないものじゃないだろ?な……。

「じゃー、かいと君は何をくれるのかな?」

こなたは手を伸ばしている。

貰う気満々か。

バッグからラッピングされた箱を取り出し、こなたに手渡す。

「さて、何かな バングルかあ」

「何だ? 期待はずれなのか……?」

「いや、嬉しいよ」

こなたは早速手首にソレを着ける。

こなたはひとしきり満足したようだ。

「みんな、今日はありがとね~」

「何よ、アンタらしくない」

「いやいや、私だってそれぐらいの常識は持つてゐるよ
自分で半非常識って言つてゐるよ」と聞こえるんだが……。
でも、こなたが嬉しそうで良かつたよ。

今日の事を糧に、また一緒に進んでいけたら……。

でも、幸せなんてそりゃく続くもんじゃない。

それは、オレがいちばん分かつていた事だつたんだ……。

知らないハズの過去

6円を迎える。これでもかとばかりのテストがへじにひざわらつしているというのに迎えた中間テスト。

まあ、実力テストにくらべれば幾分手応えもあつたし、まあいいだろつ。

テストの翌々日。

すでに結果が張り出されていてまたもや掲示板の前には人の群れができるでいる。

「今回も出遅れたなあ……」

「生徒がこんだけいるんだもの。見るのも大変なのにさらに探さなきゃならないしね」

毎度毎度こんなことに体力を使う自分が阿呆らしく思えてくるが仕方がない。

「おー、みゆきさん、今日は一位だよー」

「ゆきちゃんスゴイー！」

みゆきもなかなか嬉しいのか頬を染めている。

「スゴイじゃないか」

「いえ、そんな……」

その後、なんとか全員の順位を確認したがオレはなかなか的好成績だった。

かがみは少し落としたようだが相変わらず上位をキープ。

こなたはオレに次ぐ順位で、つかさも今回は頑張ったようだった。

「いやー、テストも済んだしこれでやっとゆっくりできるな」

「ま、一ヶ月後にはすぐに期末があるけどね」

「もう嫌だなあ……。なんでこんなにテストばかり何だろつ」

そりや、受験生だし。

一応、勉強が本分だしな。

なんて雑談をしていると一人の男子生徒がこちらに近づいてくる。

「やあ、高良さん」

「あ、三崎さん。」んにちは

男子生徒は人のよそうな笑みを浮かべている。

「今回は高良さんも頑張ったみたいだね。僕もそれなりに勉強したんだけど負けたよ」

「いいえ、いつもは三崎さんが点数も高いですし今回はたまたまです」

みゆきが普通に話してゐて事は顔なじみか……。

「なあ、誰だアイツ」

「ああ、三崎君ね。いつもみゆきと上位争いしてるので」

「ああ、そういうえば前回も前々回も名前があつた気がする。

「それに優しいしね。なんかギャルゲの親友的ポジションかな?」

「それは失礼だろ!」

「でも割と学校内でも有名だよね? 生徒会もやつてたし」

「ん~……。

あの三崎つてヤツには悪いがまったく分からない。

高2までは他人にとことん興味がなかつたからな……。

「倉場君も久しづりかな?」

「……はあ?」

「覚えてない? 小学校の頃一緒にクラスになつただろ?」

「スマンがまったく記憶にない。何年の時だ?」

「えーと、君が小六の時に転校していつたから小五の時かな? 小学五年の時か。

……思い出したくないな。

「ホントに悪いが記憶にない」

三崎は少し考える素振りを見せて口を開いた。

「ま、そうだろうね。あの頃の君は大変だつただろうから

「……」

同じ小学校つて事はあの事も知つてゐるのか。

……やりにくいな。

「そういうえば、あの事件。あの頃の傷はもう癒えたのかい？」

「つー」

「ああ、また新しい子を見つけたのか」

「……やめろ」

「君つてホント懲りないよね」

「やめろつてのが聞こえないのか！？」

「気付けばオレは大声で怒鳴つていた。

周りの生徒もオレを見ている。

クソッ！

あの三崎とか吉川ヤツ、嫌な感じがする。

こなた達は心配そうにオレたちを見ている。

「ま、君がどうしようと勝手だけどね。この次がどうなつたつて知らないうから」

三崎はポン、とオレの肩を軽く叩いてそのまま通り過ぎていく。

「ああ、高良さん。次は期末テストでね」

「あ、はー……」

オレはしばらくなことに立つていた。

ぎゅっと拳を握る力を強める。

なんで、なんでアイツにあんな事言われなくちゃならない！
オレがどんな今を生きようと横から口を出す権利なんてない……

そう思つてゐるのに、

なんで……

何でオレの想いは立ち止まるんだ！

苦しくなる。

肺が酸素を求める。

呼吸が荒くなる。

周りが見えなくなる。

自分が何をしてこるのかも、わからなくなる。

オレは……

「かいと君ーー？」

「！？」

「どうしたの？」

「何か変よ？」

つかさとかがみがオレの顔をのぞき込んでいる。

「べ、別に何でも……」

咄嗟にオレは顔をそらす。

オレは、このままで良かったのか……？

授業も終わり、家へとたどり着く。

今日はなんて日だ……。

結局あの後から授業なんて聞いていられなかつたし、こなた達との会話もうわの空だった。

再び思考をめぐらせてこるとインターホンが鳴る。

「こなた？」

「うん。今、大丈夫？」

「あ、ああ……」

「こなたにしてはこいつになく真剣な顔だ。

「上上がるか？」

「いや、口口でいいよ」

「やうつか」

こなたはしづめらぐ四葉を探していったようだが意を決したようにオレを見る。

「かいと君。今日、何か気になる事でもあった？」

「つ！」

いきなり、ピンポイントで当たられる。

確かに、何かはあった……。

「今日の三崎君の会話からおかしかった。それに三崎君との話、かいと君の過去の話でしょ？」

「…………そうだ」

「教えてくれない？ 何があつたのか」

正直言つて、迷う。

こなたが、こんなにも真剣にオレに頼んでいる。

それを断るなんてしたくない。

だけど、それがオレの過去の話だから……。

「確かに、私達はかいと君が話すまで待つて言つた。でも、かいと君が過去の事で重荷を背負つてゐるなら何とかしてあげたいって思うよー！」

こなたは、こんなにもオレを思つてくれていたのか……。
オレのために、口口まで……。

こなたの気持ちを重んじるなり、話すしかない。

例え、軽蔑されようと。

「 分かった。上がれよ。少し長くなるから」

オレは紅茶をこなたの前に置き、こなたの正面に座る。

「まあ、どこから話せばいいかな……」

あれは、

あの悪夢は、

オレが小学五年生の時だった……。

オレの家族は、父親、母親、オレ、妹の4人家族だった。父親の仕事が上手くいってる事もあって金持ち、というわけではないがそこそこ裕福な家庭だった。近所からの評判も良く、とても恵まれた環境の中にあった。

妹の倉場しおんは病弱でよく入退院をくり返していた。そして、オレと妹の親友、山宮しおん。この2人は、当時のオレにとつての全ての存在だった。

悪夢の始まりは小五の年末の事。

大晦日と正月を家で過ごすために入院していた妹のしおんを迎えて行くついでに買い出しに行っていた時だった。

父さんと母さんに連れられてスーパーを後にした。

「お父さん、お母さん。しおん、きっと喜ぶね！」

「ええ。大好物を沢山作ってあげましょ」

「ああ。たまには豪勢にいかないと」

この時までは今まで通りだつたんだ。

ふと目の前を見ると、一つのトラックが走っている。

それは、猛スピードでこちらへ近づいてくる。

あと5m。

もう逃げられない。

でも、父さんと母さんはオレを突き飛ばして、そのままオレの視界

から消えた。

「つ！ 父さん！？ 母さん！？」

オレは叫ぶ。

起きた状況がつかめなくて。

信じたくない。

でも、現実は変わらない。

「父さん……母さん……！」

父さんも母さんも、そのまま一度と動かなかつたのだ。

それから一ヶ月経つた日、

その日は妹のしおんと面会できる日だつた。

父さんと母さんの一件があつてから妹は体調をこいつれしくして退院できぬまま年を越した。

「かいとへーん！ 病院行け！」

「ああ！ 今行くよ！」

外では親友のしおんが待つていた。

山富しおんは、オレが小三の頃に引っ越してきて、家が隣、むらに妹と同名という偶然で仲が良くなつた。

父さんと母さんが亡くなつたが変わらず接してくれる彼女は当時のオレにとつて心の支えでもあつた。

「でも、大変だよね。おじさんもおばさんも亡くなつちやつたし……」

「うん……。でも、今はまだやがちゃんもいるし、そこまで寂しくない、

かな」

「本当？」

山富はそう言つてオレの顔をのぞき込んでくる。

「三回には敵わないな」

「そりゃあ、2年も一緒にいるからね」

「腐れ縁つてヤツ?」

「なんだとー!」

両親の事を乗り越える事ができたのも、彼女と妹のおかげだったかもしれない。

いや、きっと……そうだった。

「やーやーー! 元氣かい、しおんちやーん!」

「山畠さん、こんなにわざ。お兄ちゃんもいらっしゃい」

「おひ」

妹は体調を崩したとは言つてもだいぶ元氣をつだつた。

「今日は起きてても大丈夫なのか?」

「うん。だいぶ咳も少ないし、頭も痛くないから」

そう言つて笑う妹は本当に眩しかつた。

「しおんちやんも早く良くなるといいねー」

山富はそう言つて妹の頭を撫でる。

そうやれると妹は、はにかむよつに笑うのだ。

面会の時間が過ぎ、一度家にもどる。

日に日に面会時間が少なくなつてゐる事に不思議とオレは違和感を覚えなかつた。

少し強風が吹き、山畠はふるつと身震にする。

「寒つー!」

「そうだなあ。最近は天氣も悪いし」

あの日は年が明けてから一度もお天道様を煽いでいなかつた気がする。

それなのに山富は帽子を被つてゐるのだ。

ピンクと白のつば付き帽で、これはオレが去年、コイツの誕生日にあげたものだつた。

「お前、こつもそれ被つてゐるよな。出かけるときまこつもじやない

か？」

「そりや、かいと君が私にくれたプレゼントだからね」
この時のオレは、まだ彼女の言つ事の意味が分からなかつた。

そして、口々でさつきとは比べものにならない突風が巻き起こる。
そして、山宮の帽子は反対側の歩道へと落ちる。

「あ……」

「私の帽子！」

「山宮、ここで待つてろ。オレが取つてくるから」
そう言って、オレはガードレールを飛び越えた。
さつさと道路を横切り、落ちた帽子を拾う。
ついていた汚れを軽く払い、再びガードレールを飛び越えて道路を
横切る。

「山宮ー、取れたぞ！」

「っ！　かいと君、戻つてえ！！！」

「え？」

オレに突つ込んでくる黒い乗用車。

運転手の驚いた表情。

山宮がガードレールを飛び越える様子。
周りの大入達の状況。

それらが全て一瞬のような出来事で、
刹那、オレは衝撃を感じて気付けば、オレは地面に倒れていた。
乗用車の真横で。

血に濡れた帽子。

じわり、と地面を伝うオレはまさしく生命の死を物語るものだつた。

「や、まみや……？」

いくら呼んでも、返事なんてあるワケがない。

でも、受け入れられなくて

いつかの時みたいに起きあがつて笑うんじゃないかつて
飛び出したオレを叱るんじゃないかつて

そう、思いたかつた。

正式にオレと妹の転校が決まった。

これ以上、あの家にいても祖母が困るだけだつたし祖母の家は田舎の方だから都会よりも空気が綺麗だし、妹の養生にいいと思つたらだ。

山富家の両親は

『仕方がなかつた、あれは事故だつた』と言い、オレを許した。

オレが、殺したようなものなのに。

オレが飛び出さなければ済んだ話だつたのに。

オレの身体は2つに裂かれたような痛みを覚えた。

悪夢はまだ、終わらなかつた。

1年を終え、春休みに入つた頃の事だつた。

珍しく、体調が良かつた妹が体力づくりをしたい、との事だつた。
近くの公園へ軽くジョギングをしながら行く。

「大丈夫か？」

「うん。まだ平気」

普段から元から運動が苦手という事もあり、すぐにバテていたがそれでも妹は諦めなかつた。

そんな事が何日か続いた日の事だった。

妹は公園の地面に座り込んでしまったのだ。

「お、おい。本当に大丈夫か？」

「う、うん。ちょっと疲れちゃつただけだから……」

肩で大きく息をする妹を見て、本当に具合が悪いようだと思ったオレは、公園のベンチでしばらく寝させていた。

病院内は騒然としていた。

その中でオレは、呆然と立ちつくしていた。

妹は病院へ搬送されたのだった。

祖母は何やら難しそうな話を医者としていた。

オレは全てを悟っていた。

妹も、もう長くないのだと。

妹の病気はオレが思っていたよりもかなり重いもので、かなり症状も悪化していたとの事だった。

『治療中』のランプが消え、医者は難しい顔つきで出てきた。

医者はふるふると首を横に振る。

祖母はその場に泣き崩れた。

オレは、ただそれを見ているしかできなかつた。

ただ、オレの大重要なものがなくなつて、

消えていくのを見ていただけだったんだ……。

責めないで（前書き）

人間ドラマって難しいですね……。

責めないで

「 以上がオレの過去だが、どうだ？」

こなたはオレの話を無言で聞いていた。

別にこなたがオレを軽蔑しようとは突き放そうと縁を切ろうと構わなかつた。

アイツがオレを拒絶するならそれまでだし、何をされようと、どんなことを言われようとオレに拒否する権利はない。

だけど、オレに浴びせられたのは罵倒でも蔑みでもなかつた。

「 辛かつたんだね……」

「え……？」

こなたはそつとオレの手を取つた。
優しくて、暖かくて、安心して。

でも、

「 それだけかよ……？」

「 何が？」

「 オレに何か、他に言つ事があるんじゃないのか？」

「 別にないよ。私から言つ事はそれだけ」

信じられない答えだつた。

オレはどんなことを言われてもいいはずだったのに。
コイツはそれをしなかつた。

何故、許す？

「 かいと君は、ずっとそのことを抱え込んで苦しんでたんだね……」

「 オレは……守れなかつたんだぞ！」

守りたいものを、守らなきゃいけなかつた人達を！――

何としても助けたかった。

例えこの身を投げ打つても助けなくちゃいけなかつたのに。
でも、こなたはふるふると首を振る。

「かいと君は偉いよ。辛いはずなのにそれを私達に見せないで
でも……！ オレは……！」

「怖かつたんだよね。……一人でいる事がずっと嫌なんだって。
分かるよ、その気持ち」

こなたはそつとオレを抱きしめる。

暖かくて、柔らかくて、落ち着いて。

「オレはどうしようもなかつたんだ……。逃げて、責任逃れして
最低だよ……！」

「かいと君は悪くない。

私が知つてるのは、困つてる人は放つておけないお人好しで
ぶつきらぼうで、でも優しくて、

知り合つてまだ2ヶ月しか経つてないけど、それでもそれだけの事
は分かる

ああ……

「それが、私やかがみやつかさやみゆきさんが知つてるかいと君だ
よ」

こんなオレでも、まだ信じてくれる人がいたんだ。

それに気付かないで、過去ばかり振り返つて、
真正面から見てやれなくて、受け止めてやれなくて。

オレは、どれだけの人達を不幸にしていたんだ。
しっかりとオレを見てくれる人がいたのに。

父さん、母さん、山崎、しおん

オレは、アイシーリヒ生きてることなんだよな？

憑物が落ちたようにすつきりとした気分だった。
こんなにも泣いたのは、久しぶりかもしない。

いつか、分かれる日まで。
一緒にいられるときまで、大切な仲間たちと
素敵な思い出を残せたら。。。

オレが望んでいたのは、たったそれだけの事だつたんだ。

「ありがとうな、こなた。おかげですつきりしたよ」
「いや〜、私も意外な顔が見れて良かつたよ〜」

「霧園氣ぶち壊したな」

玄関先でこなたを見送る。

このことも、またいつか他のヤツにこなたが見えなきやならない。
でも、もう辛くない。

ふと携帯がホールしていくのに気がつく。

モニタには『かがみ』と表示されている。

「もしもし？ かがみ？」

『やあ。 気分はどうだい、 倉場君？』

「！？」

気に障る声。

オレを苛立たせる声。

間違いない。“三崎しんや”だ。

「何の用だ？ そもそもなんでお前がかがみの携帯から……まさか

！？』

『ん～、 どうだろね。 御想像にお任せするよ』

「テメエ、 今どこに！」

こなたはオレの動搖する様子を心配そうに見ていた。

『公園にいるんだ。 来たければ来ればいい

そつ言つて三崎は電話を切つた。

くそ！

オレは鍵をかけて自転車にまたがる。

「かいと君、 どこ行くの！？」

「公園！ こなたも行くぞ！！」

こなたも止めてあつた自転車にまたがり、 急いで自転車をこぐ。

早く、 早く行かないと つー！

過去の眞実

「かがみ！！」

日が落ちた公園は既に誰もいない。
いや、オレを含めて6人のみがいた。

公園の真ん中のベンチ。

そこにかがみ、つかさ、みゆきは座っていた。

三崎はその前に立ち、相も変わらず腹の立つ笑みを浮かべていた。

「無事、だつたか……」

オレは安堵し、地面に座り込む。
でも、様子が違う事に気付く。

誰一人、何も話そつとしないのだ。

かがみは、何とも言えなそうな顔でオレを見ている。
つかさは、オロオロとオレと三崎を交互に見ている。
みゆきは、申し訳なさそうな顔をしている。

「お前……！」

「そつかつかしないでくれよ。そこまで細かい事は話しちゃいない。
せいぜい一般に明かされた情報を公開した程度だよ」

三崎は身体の向きをオレの方へと向ける。

街灯が少しづつ公園内を照らし始める。

「お前は、何がしたいんだよ！ オレにビデオして欲しいんだ！？」

コイツを見ていると嫌な感じがする。

何か、オレの直感が「関わるな」と言つてゐるようで。

三崎は顎に手を当て、考える仕草を取る。

「強いて言うなら『復讐』かな？」

「復、讐……だと？ 意味の分からぬ事ばかりぬかしやがって

！ いい加減に」

オレは三崎へ掴みかかる。

だが、三崎はオレの腕を握り、力を強める。

「放せよ。その糞みてえな手で触るんじゃねえ」

声色が変わった。

今まで人をおちょぐるような声が一変して、低い声に変わる。

「つ！」

「分かるわけないよなあ。

今まで何も知らずにのうのうと生きてきたお前に俺の何が分かると思つ？」

オレは三崎の手を振り払う。

握られていたところがズキズキと痛んだ。

「何が……何の恨みがあるんだ！？」

「俺の人生全ての恨みだよ。

お前のせいだ俺は最低な生活を送つてきたんだからな」

三崎は大きな溜息を吐くと話し始めた。

「俺の父は運送業者に勤めていた。

母親を早くに亡くした俺を寂しい思いをさせまいといつそつ可愛がられた。

そして、俺もそんな父が大好きだつたんだ……。

でも、事件は起こつた。

年末を迎えた日。父さんはいつものように仕事をしていた。

父さんを乗せたトラックはいきなり走り出し、ブレーーキも効かないままお前の両親を轢き殺した

「…」

あの事件の運転手が、三崎の父親だつたのか……？

「世間は、俺達家族を悪者に仕立て上げた。

会社はトラックに不備はなかつたと嘘を吐き、罪を全て父になすりつけた。

そして、お前達のせいで父は夜な夜な酒におぼれては俺に暴力を振るつた。

それでも、いつか元の父に戻つてくれる事を信じた……。

それなのに……父はどうとう入院した。

心労と酒の飲み過ぎがたたつたんだ。いつ退院できるかも分からぬい

オレも、こなた達も驚きを隠せなかつた。

「それを滅茶苦茶にされた俺の気持ちが、分かるのか!? あの時はまでは幸せな家族でいられたのに!!

今度は逆に三崎がオレに掘みかかる。

「この……っ！」

でも、振りほどけない。

まるで、オレへの憎しみがそのまま力になつているようだつた。

「もうやめてえっ……！」

つかさは、叫んだ。

「つかせ……」

「もう許してあげてよ！

かいと君も家族や友達がいなくなつて寂しいんだよー 悲しいんだよー

もう責めないであげて！！」

つかさはそう言つて泣き出した。

「そうよー アンタがどんな事情があつたつて辛いのはかいと君も一緒になのよー！」

「かがみ……」

「おー人の言うとおりです。

理由がどうであれ、一方的にぶつかつてゐるだけでは何も解決しま

せん！…

「みゅあ……」

「そりだよ！　かいと君が今までどんな思いでいたか分からぬのに自分の気持ちばかり押しつけて！　そんなの良くないよ…！」
「こなた…」

みんな、オレを庇つてくれている。

三崎は、その顔を憤怒で染める。

「五月蠅いんだよ！」

何も知らない、甘々な環境で育つたお前らに分かるわけがないだろうがつ…！」

三崎はオレから手を離し、こなた達に殴りかかる。

ガツ！

オレは三崎の拳を受け止める。

「オレの大事なヤツらを傷つけるのなら、許さない！」

三崎は変わらない表情でオレを睨む。

「黙れ！　何も学習しないこの糞野郎が！」

どうせそいつ等も殺すんだろう！　昔のようにな…！」

「殺さない！　死なせない！」

昔のオレは何も守れなかつた、だからこそ今度こそは守るんだ…！」

こなたに教えて貰つた事、

オレが、いかにコイツらに支えられていたか。

過去をふり返つてばかりではいけない。過去をふり返つてばかりではいけない。

いつか、前を見なくちゃいけないんだ。

「だから、テメエもやつと前を見やがれ！

お前はオレと違つて、親父がまだ生きてるんだろうが…！」

三崎はその言葉に力を緩める。

「親父が起きたときに、頑張つたって言つて貰えるじゃねえか……！」

「父さん!」

「お前は、オレと違つんだから……」

三崎は完全に力を抜き、項垂れる。

「行くぞ……！」

オレは他のヤツらを連れて、公園を後にした。

自宅

一度、落ち着いて話をしたかったオレは4人を家に招いた。

「……済まなかつた。隠してた事には謝る」

オレの言葉にかがみはお茶を一啜りして

「もういいわよ。内容からして十分言いにくいう事だつたらうし

つかさも

「大変だつたね。何もしてあげられなくてゴメンンね」

みゆきも

「事情が事情ですし、聞かれたくない事だつてありますからね」

みんな、オレを許した。

「ね？ 私の言つとおりだつたテシヨ？」

「言つとおり?」

かがみは疑問符を浮かべる。

「私はかがみん達より一足早く聞いていたのです！」

こなたはGJ！のサインを出す。

「アンタはいつも唐突に～！」

「あだだ！ こめかみは洒落になんないつて～～！」

「」なちやん面白いね~」

「かがみさん、それくらいにしておいた方が……」

そうだ、

これが、オレの望んでいた未来だつたんだ。
オレの望むものはとっくに手の中にあつたのか……。

金曜労働賞（前書き）

やつぱり井端の方が書かれたことですね。

三崎の事件から数日経ち、すっかり日常を取りもどした。

家の鍵を開け、鞄を放る。

「少し腹減つたな……」

今日は色々あつて昼食はパン一個だけだったからな。
「なんか材料になるもんは……て材料きれんじゃん……」
そうだった。

確か昨日に全部使い切つたんだった。

「しょうがない。買い出しに行くか

そう思い、財布を取り出すが……

金がない。

はあ、銀行に行くのも先延ばしにしてたつけ……。
買い物に行く前に銀行に寄らないと

「そういう事か……」

残高辛うじて3桁。

「つーーー！ どうか、こなたの誕生日プレゼント+に金を使って
たか」

オレは頭を抱える。

仕送りは2月に一度。

今月に仕送りがあるが、この残金で生き残れるのか……？

……無理だな。

でも、どうすればいいんだ？

まだオレの歳ではそんな一流の職なんて……

「そりゃ！ なにも一流じゃなくてもいいんだーーー！」

そう。

高校生でも稼げる方法、

「バイトだー！」

ちなみに銀行のATMの前で大声で叫ぶオレは決して怪しい人物ではない。

アキバ

バイトを探してきたのに何故かここに足が向いてしまうオレは改めてオタクなんだと痛感させられるな。

「まあいいか。アキバでもバイトの募集してるところはやつてるしな」

とりあえず、そちら辺の店の広告を見て回る。
確かにある事はあるのだがどこも学生禁止とかでいまいちいいものが見あたらない。

それから探し始めて数分、

「学生OK……か。でもなあ……」

こなたの誕生日の時に店の前に来ただけのアニメイト。

「あ～！ 背に腹は代えられん！」

覚悟を決めて一歩踏み入れる。

直後、

『いりっしゃいませええええええええええええええええ…』

「うわっ！」

一人の男が突っ込んでくる。

ギリギリで避けたらその男は向かいの店の壁に激突した。
どんだけ威力ついてるんだ……？

男はのそりと立ち上がり、オレを見る。

「なかなかやるじゃないか」

「何もしてませんけど……」

どうでもいいけど、スゴイ劇画調な外見してるな。

別世界の住人みたいな。

「少年！ オレはアニメ店長の兄沢命斗だ！ 何かをお探しのようだなー！」

「まあ、ある意味探ししてますけど」

バイトを。

「ふふふ。分かっているぞ！ 少年が求めているのは、浪漫！ そ
うだな？」

「いえ、金になりそうなバイトを探してます」

『なんだってえ~~~~~…』

いちいち叫ぶな。ウザイ。

とにかくこの木偶の坊そうな男はアテにならないな。

普通に話のできそうなのは……

劇画調な男性

劇画調な女性 × 2

見た目普通そうな女性。

アレしか話にならなそうだ。

「あのー、ちょっとといいでですか？」

「はい。何ですかあ？」

ちょっと喋り方は気が抜けてるが何とか話はできそうだ。
この店にはもう少しまたもな人材が欲しいところだな。

「バイトしたいんですけど……」

「ああ、バイトの子ですねえ。」

「だったらあ、店長から面接を受けてください～」

「はあ……」

この店はホントに大丈夫なのだろうか……。

面接を受ける前から不安たっぷりな感じだ……。

面接会場

とりあえず言われたとおり、部屋でイスに座つて待つてている。
いつまで待たせるんだ店長は。

『ガチャ～～』

ドアが開く。

にしてもドアの開け方荒いな。

「君がバイト志望の子だな！――！」

あ、「コイツ店長だったんだ。

そういえば店長って言つてたよつなりうな……。
どうでもいいか。

「さて、では自己紹介をして貰おう――！」

「はあ……。えーと、倉場かいと、18歳です」

「趣味は――」

「アニメ鑑賞とかゲームです」

「特技！」

「特技らしいものは何も……」

「よし！ 合格だ！」

「早あ！」

早すぎる……。

本当に大丈夫だらうか……。

「では、明日からよろしく頼むぞ！！」

「あー……よろしくお願ひします」

だが、生活費を稼ぐためには仕方がない……か。

掛け持ち

「これを感じて……と
いまだに少し着慣れない制服を着る。

アーメイトでバイトを始めて4日。

仕事といつても簡単なもので倉庫から本を出して並べたり、店内を掃除したりするだけだ。

ま、始めてこんだけじゃそんなもんか……。

とりあえず、時間も惜しいので店内へ出る。

「ひなたさん、こんちには」

「あら～、倉場君。こんにちは～」

オレの担当の“富河ひなた”さん。

少々気の抜けた喋り方をする人だが、実はいくつものバイトを掛け持つスゴイ人だ。

なんでも、貧乏な家をなんとかそのバイトで生計を立てて妹を養っているらしい。

ここだけ聞けば割といい話に聞こえるのだが、

散財原因もこの人らしい。

バイトの帰りにオタグッズを購入しまくっているみたいでなかなか家計が潤わないみたいだ。

「これをこつちに運べばいいんですね?」

「お願いね～。そっちが終わったら次はこつちもお願いできるかしら～？」

「分かりました」

新入荷の本を手際よく並べる。

古い本は普通のスペースに置く。

単純な仕事だが本の量が多いので結構な重労働だ。

「すいません。のミニックってどこですかね～?」

一人の少女がオレに声をかける。

「ああ。それでしたら……ってえーー！」

長すぎる髪

みょんとでたアホ毛

ちつさい身長

ぺたんこな胸

「こなた！」

「あれ？　かいと君じゃん。どしたの？」

「いやー、かくかくしかじかで」

今までの経緯をハ文字で説明したところでのこなたの求めてる「ミシクの所へ案内する。

「そつかー。かいと君もとうとう労働者になつたかーー」

「まあ、確かにゆっくりできる時間は少なくなつたけど、四の五の言つてる場合じやないだろ」

「そだねえ」

確かにバイトを始める前に少し給料をいただいたがアレでも結構厳しいのが現状だ。

「掛け持ちとかどうかな？」

「は？」

こなたは唐突にそう言つた。

「掛け持ちなら収入も上がるでしょ？　私がいいところ紹介するよ

」

「マジでか！」

「モチのロンヤー。」

こなたはビシッと親指を立てる。

「……」

看板には『コスプレ喫茶』と書かれている。

そういう事が。

「ささ」、入つて入つて

こなたに文字通り背中を押されて入店する。

「やふ」店長

「おお。その子が例の子かい？」

「そうですよ」。なかなかハイスペックっしょ？」

「なかなかだな」

二人してこそこそ話している。

なんか悪寒が……。

「さ、とりあえず面接しようか

「は、はあ……」

面接中

アニメイトの時とまつたく同じシチュエーションの面接をされた。

ほんの4、5個の質問に答えただけで合格した。

ホントに大丈夫なのだろうか。アキバの経営は……。

「じゃあ、さつそくやろうか

「いきなりかよ！」

「いいじyan。店長が今日から出でくれたらお給料つり出すって言つてるんだよ～？」

人間とは金に貪欲だな。

オレも例外じゃないわけで。

「コレを着るのか……？」

見た感じ、モロコスプレな衣装。

「今日は騎士^{ナイト}だからね。ちなみに私は『レ』

こなたはくるりと一回転する。

どつちかって言うと騎士というか剣士（セバ）だけど。
まあいいか。

受けた仕事は責任持つてやる。

オレは少し重い衣装を持って更衣室へ入る。

数分後、

「こんなもんか？」

「うんうん。やっぱり私の目に狂いはなかつたね～」

「なんだそら」

こなたは勝手に一人で満足げな顔をしている。
持つてているときはアレだつたが実際に着るとかなり重いし暑い。

空気が抜けるところがほとんど無いから熱気がこもる。

「じゃー、かいと君。早速お仕事ね。

3番テーブルの人から注文聞いてきてね

「は！？」

まさかの接客^{ホール}だった。

「ちょ！ いきなりすぎるって！」

「だいじょーぶ！ 何事も経験だよ！－」

こなたに控え室から押し出されて仕方なく指定のテーブルへ。
客は女性2人組。

「えと、『注文はお決まりでしょうか？』

「それじゃあ、オレンジジュースとメロンソーダを」

「あとショートケーキ2つ」

「りょ、了解です！」

接客業つて結構疲れるんだな……。

とりあえず、厨房へ注文の旨を伝えて控え室に戻る。

「いやー、なかなかだつたよ！」

「つたく……。無駄に緊張した……」

開放感と変な達成感、そしてこれから不安を感じながら時間は過ぎていくのだった。

無事に6月を終え、何とか生き残ったオレに届いたのは柊姉妹の誕生日の話だった。

「というわけで、7月7日はかがみとつかさの誕生日なのだよ」

「へえ。そうなのか

「ですから、こなたさんと同じようにお一人の誕生パーティーをと思いまして」

「どうか。

こなたの時はだいぶ大変な思いをしたが既にプレゼントも買つてあるし、あの時ほどは慌てなくて済むだろう。

「場所はかがみ達の家でやるから遅れないようににしてね~」

「お前が言つた!」

そつオレが叫んだと同時にチャイムが鳴り、各々の席へ戻つていった。

その日の授業も終わり放課後。

「おっす~。帰りましょ~」

かがみと合流し、教室を出る。

私立校で金があるため、教室内は冷暖房完備だが流石に廊下はそういつた設備はなく教室を出た瞬間に嫌な熱気がまとわりつく。

「うわ、暑っ!」

こなたは既に汗をかいている。

オレは鞄から下敷きを取り出してぱたぱたと煽ぐ。

「暑いな……。この分じゃ夏休みなんかもつと暑くなるんじゃないのか?」

「そうですね。今年は例年には猛暑と言われていますから

これも地球温暖化の影響だらうか。

「それにしたってこう暑いとやつてらんないわよね……」

「そうだね。私なんて教室からトイレに行くのもおつかになつ

ちやつて……」

なんて雑談をしながら駅まで向かつ。

「じゃあ、オレとこなたはバイトがあるから」

「「「またね~」「」」

ちよつど着いた車両に乗り込み、アキバを目指す。

「ハロー、こなた、かいと。おフタリともハヤいですね

「おっすパトリシア」

「パティ、やふ~」

後日知つたことだが、パトリシアもこのバイトだったらしい。オレと同じくまだバイトを始めて日が浅いみたいだから何かと同じ場所で働く事が多かつた。

「今日の衣装は?」

「え~と、今日はメイド＆執事だからかいと君はこれね
「はいよ」

黒の衣装を渡されて更衣室で着替える。

数分後

「こなた、これは?
「メイド服だよ?
「見れば分かるわ!
オレが身につけているのは黒いフリフリのメイド服。
なんでこんなもの着させられているんだ?

「いや、かがみん達に今度見せようかと」

こなたはそう言つて携帯でオレを撮る。

「や、やめろ！ 摄るんじゃねえ！」

「ダイジョーブ！ かいとはジユコウもバツチリあるネ！」

「嬉しくねえ ！！」

本当に嬉しくなかつた。

店も閉店の時間を迎える。

後かたづけ等をしていると店長がオレに話しかける。

「ちょっとといいかな？」

「あ、はい」

何事かと思つたオレだが店長の表情は割と軽いのでそれほど重大な事じやないだろ？

「7月7日なんだけど少し出でてくれるかな？ 少し店員が少なくてね」

「7月7日ですか……」

かがみとつかさの誕生日の日か……。

幸い休みの日だし、パーティも夕方からだ。

少し遅くともなんとかなるかな……。

「分かりました。5時半くらいまでならなんとか」

「そうか。助かるよ」

始めたばかりで断るわけにもいかないし、仕方がないよな。

オレはそつ思い、残りの片づけを始めた。

嫌なフラグが立つた気がするがあえて言わないでおこう。

聞に会いたい

かがみとつがわの誕生日。田井田。

朝早くに家を出てバイト先へ向かう。

「おはよひじやいま～す」

「やあ、おはよ！」

「うひす」

店長に挨拶し、早速更衣室へ向かう。

何とか間に合えればいいんだけどな

こりしてバイトの時間は過ぎた……

とっくに7時。

「やばい！」

オレは店長に用事がある血を防えてすぐに店を出た。

「マジかよ……！」

オレはがっくりと頃垂れる。

『現在、人身事故のため運行を停止させて頂いております。大変ご迷惑を』

流れるアナウンスの情報にがっくりと膝をつきたくなる思いだつた。人身事故のため運休。

恐らく処理には相当時間がかかる。今日はもう出ないだろう。

「くそ！ なんでこう上手くいかないんだ！」

オレは力任せに近くの壁を殴つた。

……やるしかない。

かがみ達にプレゼントを渡すため、アイシング『おめでとう』と言つてやるために。

どのみち家に帰るにはやうなぐちゃいけない事なんだ。

「走るか……」

オレは駅を出ると全力疾走でかがみ達の自宅を指したのだった。

かがみ side

パーティが始まる時間になつてもかいと君の姿は見えなかつた。どつかで足止め食つてる？

それとも事故？

時間が過ぎると共にそんな不安がよぎる。

「かがみくん。 どしたの？」

「何でもないわよ。 あとかがみん言うな

「かいと君が来ないから落ち着かないんでしょう？」

こなたは嫌な笑顔で私を見ている。

「んなつ！ ベ、別にそんなこと思つてないわよ！」

「『別にあいつの事なんて何とも思つてないんだからね！』って言つて？」

「うつさいわ！」

でも、こなたの言つ事も当たらずも遠からずつて口だつたかも。いくら待つても、彼の姿は見えなかつた。

かいと side

オレは夜の街をとにかく脇田もふらりと突っ走つていた。
肺が酸素を欲しがつていて。

オレの足が限界だと叫んでいる。

でも、そんなことはどうでもいい。

ただ、今日が終わる日までにアイシング『おめでとう』と、直接会

つて言いたかった。

それだけがオレの中にあった。

「はっ……はっ……」

よつやく柊家が見えた。

だが既に時刻は11時を過ぎるかもつすべ12時になつそうだ。

間に合わなかつたか……。

オレはそう思い、踵を帰して血弾を手指す。

「遅いわよー」

「え……？」

オレはゆつくりと振り向く。

かがみはいつの間にか玄関の前に立つていた。
少し、瞳が濡れているよつだつた。

「遅いわよ、バカ！」

「ん、ごめん」

オレはかがみにそつと歩み寄る。

「バイクが長引いてさ、電車も止まつて」

「いい訳なんて聞かないわよ！」

かがみはそう言ってそっぽ向いてしまつた。

「ごめん。心配かけたな」

「心配なんて……」

かがみはそこまで言つと、声を押しとどめた。

「それから、誕生日おめでとう」

かがみはその言葉に赤面し、俯いた。

拳がわなわなと震えている。

殴られるか？

殴られてもいい。
そう思った。

でも、ぶつかつたのは
かがみの身体だった。

「かがみ……？」

「心配したんだから……！」

かがみの声は震えていた。

泣いているのだろう。

「「めん。ホントに」」めんな

オレはそう言ってかがみの後頭部をそっと撫でてやる。

「かがみ。オレからのプレゼント、受け取ってくれるか？」

かがみはオレの腕の中でゅっくつと頷いた。

かがみに似合うと思つた黄色の星のブレスレット。

ラッピングされた箱をバッグから取り出してかがみに手渡す。

「つかさにも渡したいんだけど、家に入れて貰えるか？」

かがみは声もなく頷く。目元を擦つているところを見るとまだ泣いているのだろう。

『TSUKASA』ヒプレートのかかったドアを開ける。

つかさはベッドですうすうと寝息を立てていた。

オレは枕元にそっと座り、軽く撫でてやる。

「つかさ。パーティ、出れなくて」めんな

オレはバッグから緑の星のブレスレットの箱を取り出して枕元に置く。

「つかさ、誕生日おめでとう」

オレはそっと呟いた。

つかさが一瞬、笑顔になつた気がしたが氣のせいとしておひへ。

聞に会いたい（後書き）

地震のニュースが多いですね。
とにかく今は無事を祈るのみです。

海へ…

かがみ&つかの誕生日も終えてじばらくしての事。

「てなわけで、明日から夏休みや！ 楽しむのはええけど宿題もきつちりするんやでーー！」

と、しつかり念押しして黒井先生のありがたーいお話を終わった。今田は終業式で明日から夏休み。

これでじばらくはゆづく

「ねーねー、かいと君。海行かなー？」
ゆっくりできないみたいだ。

「海？」

とりあえず聞き返す。

「そう、海」

「なんでまた？」

こなたは「ぬつふつふ」と笑うと叫んだ。

「それは夏休みといえば海！ ラブコメといえば海イベントは外せないからだよーー！」

「いつからこの世界はラブコメワールドになつたんだー！」

少なくともここは現実世界だ。

(ちえ……。相変わらず鈍感だなあ)

「？」

こなたが何か呟いた気がするが気のせいか？

「というわけで海行こうよー！」

「分かったよ……」

ま、今の内に思い出を作つておくれのも悪くないだろ？

「アイツは例の如く遅刻か」

「そこら辺はもう期待しちゃダメよ……」

オレとかがみは揃つて頭を押された。

だいたい集合場所がこなたの家の前なのに遅刻するつて珍しい事だ。

今現在集まっているのは、オレ、かがみ、つかせ、みゆき、小早川、岩崎、黒井先生、成実さんだ。

「やふ~。お待たせ」

「「遅い……」」

オレとかがみは即座に突っ込む。

「たく……。小早川はちゃんと待つてるのにお前は何をしてたんだよ……」

「いや~、ネトゲで限定クエやつてたからー。」

お前つてヤツは!

「なんて羨ましい事を! 何を狩つてやがった!」

「はいはい。アンタまでボケるな」

かがみさん、速攻で突っ込む。

「にしても、小早川や岩崎も一緒にたんだな。や、別に悪くないけどね」

「だつて今日はおとーさんがいるし」

「は? 別にいいだろ?」

「だから、おとーさんがいるんだよ」

「……ああ」

「そうこう」とね

つかせもみゆきも苦笑だ。
てこづか分かつてしまつあたり、ダメな気がするが。

その頃、そうじゅわ

「やべー、超つまらん……」

「さて、オレは黒井先生の車に乗せて貰うか」
前に成美さんの運転を見たがアレはもう無理だ。

あんなのに何時間も揺られるなんて耐えられそうにない。

「んじゃ、私も黒井先生の方で」

「私もお願いします」

「ゆたかが乗るなら私も……」

黒井先生の車にはオレ、二なた、小早川、岩崎が乗り、
成美さんの方にはかがみ、つかさ、みゆきが乗る。

まずは、成美さんの車が出発した。

「死ぬなよ……」

オレは先に逝く盟友達に敬礼した。

「じゃ、オレらはゆつたり車旅でも楽しんだ……」

数分後、行き止まり。

數十分後、どこかのグラウンド。

道を間違えるわ、戻れなくなるわで立ち往生。
(くそ！ どっちもハズレだつたか！)

更に數十分後、

「いい眺めだな……」

「そうですね……」

「……」

オレ達は街を一望できる丘の上にいた。
小早川も岩崎も苦笑気味だ。

「なな」さんつて、運転上手だよね……」「は？」

こなたは柵に腕を置き、街を見る。

「こなたね、車に乗ると酔っちゃうんだ……。だからね、酔い止めの薬持つて来てるんだけど、なな」さんの運転だと全然気持ち悪くならなかつたよ~」「

こなたはそう言つて黒井先生の方を見た。

「泉……つて！ この状況でつつこんどる余裕ないわーー！」

先生はせつ叫ぶと再び地図に目を落とした。

数時間後……

海水は夕日の光を受けてオレンジ色になつていた。
寄せては返し、波の音だけが響く。

オレ達はそんな海を呆然と見ていた。（黒井先生＆成美さん除く）
ちなみにかがみ、つかさ、みゆきの3人は青ざめた顔だ。
その事に関しては首を突つ込まないでおく。

不意に成美さんと黒井先生が口を開く。

「さて……」

「旅館でも探そか」

ちなみにこの発言については突つ込む気すらおきなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575p/>

らき すた オレと愉快な仲間たち～旅立ちの日へ～

2011年10月6日15時04分発行